

# 『パンフィリアからアムフィラントスへ』

— 翻訳・注解・解説 —

メアリ・ロウス作  
村里好俊 監訳

杉本美穂／江藤由紀 共訳  
渡邊晶子／福井由美子

1

[P 1]

漆黒の夜の帳<sup>とばり</sup>が一番暗く

死の模倣、眠りが私の感覚を捉えて  
わたしがわたしでなくなるとき、想いは動く  
どんなにすばやい想いよりはるかに早くて。

眠りの中でわたしは見た、翼ある欲望に曳かれる花馬車を  
中には愛の女神、艶やかなヴィナスが座り  
女神の足元にはその息子、いよいよ炎を継ぎ足す  
女神が高々と掲げた燃える心の臓に。

だが、どの心臓にもましてめらめらと燃える一つの心臓を  
女神は持ち上げ、それをわたしの胸にあてて、言うには  
息子よ、閉じておしまい、かく勝利を我らがものにせん、と。

息子は命に従い、わたしの哀れな心を恋の殉教者とした。  
目覚めたわたしは願った、夢のようにそれが離れてくれればと。  
だがそれ以来、ああ、わたしは恋する者となったのだ。

2

[P 2]

愛しき眼よ、何と巧みにそなたは飾ることか  
凝視する魂が愛惜<sup>いと お</sup>しく尊ぶその祝福された天体を。  
そこは求められた数々の凱旋の愛すべき場所  
愛神の軍勢が生まれた栄光の宮廷<sup>そば</sup>の側。

人々がそなたを四月の最も馨しい朝と呼ぶのはふさわしい  
目映い光から心地よい視線が顔を出すとき。  
それは雲や霧一つない、陽光まぶしい一日  
いまだ生まれぬあこがれを優しく育てる炎。

天の二つの星よ、地上に恵みを与えるため差し向けられ  
すべての歓びを生み出すあの玉座にすえられ  
輝き、燃えながら、喜ばしいが、その魔力は

傷つけながら、その傷さえも歓びとする。  
喜ばしや、その力。強大なるかな、その<sup>りよりよく</sup>膂力  
幸いにも、傷つけることで得意顔になれるとは。

3

[P 3]

まだ希望はある。ならば愛神よ、せめて役割を果たして。  
分を弁え、わたしのことを考えて。  
わたしの心を征服したあの眼の中で輝き、  
わたしの心がそなたに応えるに愚図なのか確かめて。

わたしの胸に宿り、哀れみがくすぐられるのを確かめて  
その胸で真の痛みに燃えている炎を感じて。  
不実にかかわる想いを、誠実な仕方では  
やつれない想いを追放する炎のゆえに。

わたしの眠りを覗いてみて、あなたを思うがあまり休息が  
取れるかどうかを。思い悩んで、青ざめ欠乏し  
ひたすら哀れみを、わたしは嘆き求めている。

あなたの召使を見捨てるおつもりか。考えてご覧なさい。  
愛の冠を被る者はそのような過ちを犯してはならず  
その力に頼る人々の為になることを求めるべき、と。

4

[P 4]

控えよ、暗い夜よ、わたしの喜びは今ふたたび芽吹く  
先頃まで枯れていたのに。あの方の冷たい表情は  
心の根を凍らせ、最高の楽しみを抹殺し  
<sup>いかずち</sup>雷がわたしを打ち、楽しみをしぼませるけれど。

その時わたしは、ああ、苦い嗚咽と苦痛とで  
わたしの今の不運を密かにうめく。  
慰安の光は陰り、苦悶が矜持に成り代わり  
悲痛が不思議にまして、空しく悲嘆にくれる。

最大の悲嘆は、善き時代への追憶が、昔わたしが  
知っていた最高の日々が消えてしまったことの  
生き証人としての追憶が、わたしを苦しめるとき。

先頃消えた過去の驚異が、あの大雪のように、溶けて  
屑となり、どんな変化を伴うのか分からないように。  
いま命が甦る、かつてそれが育った所に。

5

[P 5]

眼に快い容姿は常に不幸をもたらすものなのか。  
堅固な欲望は痛々しい責め苦を味わうものなのか。  
魅力ある眼は心に刺となるものなのか。  
あるいは甘い唇は反逆の心を隠しているものなのか。

太陽は最高に麗しいとき、どんなに強い眼をも眩ませる  
あまりに見つめ過ぎると、視力の弦<sup>つる</sup>を切ってしまうから。  
欲望はいつも遮られると、悪事に走るもの  
そして不運にも絶望を産み落とすことになる。

眼は勝ち誇ろうと、拒絶は刺となり  
木が芽吹くまえに蕾を殺す。  
甘い唇は、愛を知らねば、毒に等しい。

欲望よ、視線よ、眼よ、唇よ、求め、見て、経験し、味わえ  
お前たちは不実ならば呪いしか手に入れられぬ。  
ならば示すのだ、害悪を嫌い、愛を喜ぶことを。

6

[P 6]

いつもあくせくとわたしの上に侮蔑を積み上げようとししないで。  
喜ばないで、不幸なわたしに残酷を示すことを。  
すべての悲しみが流れ込むこのわたしに。<sup>すみか</sup>住処を作らないで  
あなたに与えられ、あなたゆえに失われる住処を。

ああ、悲しみさえもわたしを哀れむようになる。  
軽蔑は自らに非を鳴らす、そのような悪意を示すゆえ。  
そして喜びの極致が流れる場所を譲ろうとする。  
なのに惨めなわたしは、あなたゆえのあらゆる拷問に耐えている。

長いことわたしは苦しみ、それを大切に思って来た、それが  
あなたの意志だから。でも苦痛はいよいよ親しいものになった。  
わたしの最期をお望みですか。そうおっしゃれば、差し上げます。

わたしの心を縛る深い絶望はあなたゆえなのだから  
わたしは死を少しも心労と感じないのです。  
いまわたしは死を求めます、あなたが救って下さらないゆえ。

ソング 1

[P 7]

「春は来たりぬ  
木々に、野原に、花花に  
牧場は春の盛りを味わう  
しかるに悲しみのにわか雨  
わが眼からどっと溢れ

いやというほど思い知る  
冷たき冬、いまだ残りて  
春の気配なきことを。

「陽は大地に与えぬ  
熱を、光を、喜びを  
春を楽しみ、欠乏を嫌い  
豊かさを宝とする。  
私には熱は冷たく  
光は暗く  
至福を阻まれた私には  
熱も光も見えはしない。」

女羊飼、かく言えり。  
悲嘆に押し潰され  
真実の愛は裏切られ  
平安を奪われし女羊飼  
泣く泣く言うには  
「わが破滅、近づきぬ  
柳の枝を付しわれの  
<sup>さだめ</sup>運命、かくなりぬ。

「柳の木の枝を  
<sup>こうべ</sup>幸なき頭に飾らん  
それこそ生き証人  
愛の望み、断たれしことの。  
わが衣服、至る所花綵の  
刺繡模様に飾られぬ  
散乱せしもの、結ばれしもの  
繋がれしもの、落ち掛かるものあり。

「樹皮はわが日記帳  
日ごと綴らん  
幸なきわが物語  
<sup>さだめ</sup>運命の悪意に晒されし奴隷の。

根はわが寝台  
夜ごと横になり  
不実を嘆かん  
真の愛、滅びしゆえに。

「これらの詩行を残さん  
正しく理解し  
わが墓に供えてくれん  
恋する者が来りなば。  
く常に誠実に愛せし女<sup>もの</sup>  
惨い絶望と変心で  
殺され、邪険な心労を抱えて  
葬られし女、ここにその末期を止めん」

7

[P 8]

愛神よ、責め立てるのをやめて、あなたの勝ちです。  
抵抗もしないのに攻めるのは、臆病というもの。  
どうかやめて、あなたの束縛に屈するがゆえに。  
いつまでもあなたの力に執着するのをやめて。

見て、わたしは従うわ。軍を解散して。  
わたしはあなたの下僕<sup>しもべ</sup>、征服され、縛られて。  
決して敵ではなく、あなたの要求を助けて  
逆らった人々から賦課金を徴収しています。

いまあなたは、わたしの愛を求めておられるご様子。  
わたしは告白します、わたしに選ばせたのはあなたのご意志  
あなたの美しい御姿に、わたしは恋する者となり  
自由を捨て、苦しみを選んだのだと。

だけど、神様、あなたのこの子供っぽさは大嫌い  
あなたの魅力には従いますが、眼のないあなたは愛せない。

悲嘆の力に導かれ、わたしに間違っかけてられた  
背信の疑いに、嘆きの淵へ追い込まれて  
わずかな慰みを求めて詩行に赴くが、購われた詩は  
苦しみを増すばかり、悲嘆は芸術では癒されない。

ああ、常に誠実で心変わりを知らぬ心の中を  
薄情さはどんなに生き生きと動き回ることか。  
それは未知の苦悶を、際限のない苦痛を生む  
故なく落ちるとめどない涙とともに。

わたしはまぶしい光を避け  
わずかな光が欲しくて漆黒の雲を求める  
他の人には暗闇しか送り届けない雲だけれど。  
薄明がわたしを照らす、わたしの視力は太陽を嫌うから。

暗闇の中で生きようと、わたしは凱歌を歌う  
薄情さもこの不当な扱いも愛を鎮められはしない。

あなたは御満悦ですか。いくら御満悦でもわたしは結構。  
楽しいですか。わたしはあなたの楽しみ事を妬みません。  
御満足ですか。御満足はあなたの許に留まればいい。  
至福をお望みですか。常に望み、常にお喜びなさい。

悲しい不運には幸なきわたしを滅ぼさせ  
苦痛にはわたしを支配させ、常に自由に支配させなさい。  
すべての悦びはそれと相反するものを操り  
善を引き止め、わたしは苦悩のみを見る。

喜びは奪われ、危難のみうろつき  
絶望が場所を占め、侮蔑が支配を得た。  
しかし固い愛がわたしの感覚をしっかりとつなぎ止め  
軽蔑ゆえに、わたしは悲しみと縁を結ばれる。

悲嘆と夫婦<sup>めおと</sup>にならねばならぬなら  
わたしは悲しみに嫁ごう、こうして絶望がわたしの長<sup>おさ</sup>なのだ。

10

[P11]

くたびれた旅人は、倦み果てて、はるか遠い場所で  
苦難の終止符を求めたが、苦痛も労苦も  
果てしがなく、状況も好転せず  
ついには喜び勇んで家へと連れ戻されるが

気楽さは見つからない、恐れは消え、満足感は天に昇る  
魂のごとく、喜びを満載してはいるが。  
わたしは違う。わたしの上には新しい歓びが舞い降りる  
その歓びは初子<sup>ういご</sup>の至福と同じ高さで生まれたもの。

旅人は体の苦痛に疲れ、わたしは精神がくたくただ。  
旅人は手足の安らぎに快感を覚え  
わたしは誠実への信義を見ることに  
最大の幸福を覚える、希望が快楽の海を泳ぐとき。

真実語る、わたしへの蔑みを生んだのは浅はかな判断であったと。  
それがいったん認められると、わたしの心には喜悦が湧く。

11

[P12]

そなた、限<sup>きり</sup>のない苦悶よ、わたしの安らぎを圧迫し  
わたしの苦悩の悲しみをどれだけ楽しむつもりなの。  
愛はわたしを苦しめないで今以上の好意の情を表さないのか。  
わたしは常に生き、ずっと軽蔑を感じるのだろうか。

ああ、いまは歩みを止めて、わたしの悲嘆にしばしの休息を  
与えて。わたしの心を鋭い苦痛で養わないで。  
一度なりとわたしの残酷な運命がせめての慰藉を得られ、  
長きにわたる苦悩を癒すのをこの眼で見たい。



残忍の汚名を着せられて、栄誉ある神の称号を  
汚してはならぬ、愛神よ。

わたしに愚痴をこぼす口実を与えてはならぬ、激情のみが  
わたしに挑みかかる場所が見つかるなどと。

ああ、急いでやめて。くどくどとわたしの救助の必要性を  
論争するのはやめて、援助が手遅れにならないように。

12

[P13]

長々しい夜の苦悶に飽き飽きし

わたしは朝を願う。朝が来ると、歓びを希求する。  
新たな拷問が疎外されたわたしの激痛に歪む心を  
危害の力で初め傷つけられた心を、滅ぼそうとするとき

わたしは夜を嘆き求め、いま一度昼間は飛び去って行く。  
明るさは消え去り、この場所で享受すべき休息は  
篡奪され、憎悪が権力を欲しいままにする。  
夜は悲嘆を幽閉できない、怨念のごとく真っ暗なのに。

わたしの想いは物寂しく、夜の顔は同じく寂しく見える。  
わたしの苦痛は長々しく、夜の時間は長たらしい。  
わたしの悲嘆は大きく、心慮は限りがない。  
夜の顔、夜の力、そして全てが苦悩の判定を受ける。

ならば、夜よ、歓迎するぞ、口のうまい昼間よ、お別れだ。  
昼間は希望を生むが、歓びには足止めを食らわすゆえに。

ソング 2

[P14]

一晩中わたしは泣き、昼間中すすり泣く、ああ。  
常に望みながら、わたしは拒む、ああ。  
嘆息をつき、悲嘆の声を上げ、愚痴をこぼす、  
わたしこそ不幸の貯蔵庫と、ああ。

希望は冷えてわたしは凍るが、しかし燃える、ああ。  
炎から逃げようともがくが、しかし逆戻りする、ああ。  
悲嘆を急いで後にするが、悲しみの足は速く、  
わたしの心にあらゆる悲痛がのしかかる、ああ。

相反するものから逃れんとするが、ああ。  
相反するものを避けられない、ああ。  
それらは腕試しをすることを楽しみ、  
わたしの想いを絶望へと縛り付けるのだ、ああ。

ならば、どこへ行けばいいのだろう、ああ。  
絶望があらゆる希望の先を行くときに、ああ。  
森へ行こうとすれば、キューピッドが追いかけて  
わたしの哀れな魂を愛の掟に縛り付ける、ああ。

ならば宮廷へ。許さぬと、彼は叫ぶ、ああ。  
宮廷には真の愛の影すらないと、ああ。  
あそこは偽物の恋人たちに任せておけ、  
おまえの真の愛はあらゆる真実を明かすのだ、ああ。

ならば静かに休み、これ以上詮索するな、ああ。  
あらゆる場所は愛に似ている、ああ。  
こうして一度愛し始めたら、愛に一途であれ  
そしていつも言うのだ、命が愛と共に尽きるまで、ああ、と。

13

[ P 15 ]

愛しい方、自ら食物を与えた者を餓死させてはなりません。  
救うことがあなたの栄光となる者を滅ぼしてはなりません。  
あなたが精気を与えたその魂を殺してはなりません。  
軽蔑ではなく、憐憫に、あなたの勝利の旗は立っていました。

容易いことです、あなたの意のままに、  
墓へと赴く覚悟の者の血を流すことなどは。  
慈悲を発揮してこそ真の価値をいっそう希求することができる

善を守り、善を壊すのではなく養うことで。

あなたの視線はわたしが渴望する食物。

わたしの中で燃える隠された炎でわたしを犠牲にしないで。

あなたへの称賛を吐き出すその息を止めないで。

一瞥をくれるのがどんなに易しいことか、報酬でさえあるか

お考えになって、わたしはその一瞥に縋って生きているの。

わたしはカメレオンのように生き、そして愛します。

14

[P16]

こうしてわたしは征服されるのか。それに抵抗する軍勢を

失ったのか、わたしを滅ぼすことを快樂とするその意志に。

指をくわえたままなのか、それがわたしの力を食いつぶし

捕虜として緊縛され自由を奪われたわたしを先導するのに。

愛には初め人々の空想を自由に泳がしておかせよ。

欲望には愛の炎を消えさせ、春にはやさしい雨を憎ませよ。

愛神には恋の矢を投げ出させ、視力を持たせ、不品行の恥と

憧れが至福の時間を妨げるのを眼にさせるのだ。

どうして全盲の愛神の魅力に抵抗してはならないのか。

隷従せねばならないのか、愛神の望みどおりのことをして。

いな、かくまってくれる主人を捜すのだ。愛神の子供じみた

悪戯からわたしは逃げる、そして自由を宣言するのだ。

だが、ああ、受けた傷が亡くした心に告白させる、わたしは

恋をしているし、しなければならぬと。さらばだ、自由よ。

15

[P17]

哀れな夜よ、心から歓迎します。

その地味な衣装の方がわたしは好きです

人々の空想を高く飛翔させるあの派手な衣装よりは。

それは外見のみ華やかで、中身は汚れています。

そなたの厳しく物寂しい外観を見るのが好きです。

それはわたしの魂、死に行く純粋な心にふさわしい  
歓びに燃え、悲惨に消えた  
幸せな火の残り灰に似ています。

そなたの表情と落ち着いた歩き方が好きです。

その均等な足さばき、私たちには、とりわけ虐げられた  
わたしには、愛らしく優雅と見える足取りは

哀れなわが身に静かな安らぎを授けてくれ

そなたが立ち去ったとき、惜しみなく昼間に認めてくれる  
全ての悪が是正されるを見るための清らかな光を与えることの。

16

[P18]

ええい、眠りよ、わたしに取り付かないで、脅えさせないで  
そなたの重苦しい、死に似た力を奮うことで。

偽物は死神の本体よりも下劣で浅ましく  
かようなまやかしはわたしの想いをいっそう苛立たせるから。

おまえは偽りの姿形がわたしの魂を怖がらせるのを見逃す

時には希望を孕んだ妖精の似姿で  
しばしば愛する人に瓜二つで現れて、意地悪く  
悪意で歓びに止めを刺すことが嬉しいかのように。

その時わたし（おまえの哀れな道化）は歓びが溢れていると思い

おまえのたわいもない影たちは滅ぼすのだ、  
おまえの意のままの、その時には無感覚のわたしそのものを。

でもいまは優しくしておくれ、永久に眠らせておくれ

そうして永久にあの大切な影像を抱かせておくれ。  
あるいは常に目覚めさせて、わたしの感覚が自由であるように。

やさしい幻影よ、なぜわたしに歓びを与えようとするのか。  
このさもしい場所では歓びなど苦痛、悲痛に過ぎず  
喜悅あるいはそなたの独りよがりの心地よい外観を味わうのは  
ただの恥辱としか考えないこのわたしに。

悲嘆の夜を過ごしたことのない人々に喜ばしい物を見せなさい。  
歓びが媚を売り、微笑した顔が陽のごとく現れ  
悲嘆は嘆息、苦悶の声、悪意ある妬みが  
入るべき空間をまだ見つけていなかった。

ああ、わたしには山のような悲哀がのしかかる。  
さもなければ、あらゆる危難がわたしを当てにして  
年季奉公の召使のように仕えようと押し寄せる。

欲情の熱は、わたしが憂慮の霜を味わうときに  
わたしの愛に事欠くが、飽食は愛とともに燃え  
しかし凍える。いっそ地獄にいるがまし。

昼と夜のどちらを好きになるべきか。  
昼中わたしは苦い苦しみの中に生き  
わたしへの不正を知るため、清らかな光を楽しむが  
光の中にあらゆる悪意を感じて、この上なく悲しむ。

夜には、暗闇が全ての明かりを禁じるが  
悲嘆の姿が眼にはっきりと見え  
嫉妬が後に続き、その愚かしい策略が流れ来て  
疑惑の不実な波に舞い降りる。

わたしの眼には激情が邪悪な過誤を卑劣にも食べ物にするのが  
よく見える。恥辱、疑惑、恐怖の感情が産み落とす  
過誤を。だが激情は大胆に間違ったことを考えようとする。

昼と夜の両方にこんなことを感じるのならば、どちらがよいのか。

昼には歓びが暗い、夜には光が抑えられるのに。

両方とも棄てて、止めを刺せ。これらは互いを台なしにしあう。

ソング 3

[P21]

止めよ、わが想い、高き憧<sup>あこがれ</sup>憬への

空しい望みを熱望してはならぬ。

喜びのあらゆる手段が奪われたのが

分からぬか。いかな喜びも残ってはおらぬ。

だがわが想いは断言すると思えるのだ

失意の中にわずかな希望が生きていると。

希望よ、今一度、喜びへの希望よ

喜びを滅ぼす恐怖を葬り去れ。

絶望が私たちから遠ざけた

なけなしの慰めを想いは与えてくれた。

ゆえにわが想いを大切に育て

決して非業の死を遂げさせてはならぬ。

嘆くのは無駄なこと。

苦しみゆえに死ぬのは奇態なこと。

想いがどのように立ち上がり

希望なき所で勝利を得るか考えてみよ。

想いこそ恋人たちの宝物

恋する者は想いによって愛の度合いを計るから。

ならばやさしい想いよ、わが恋慕の情を案内せよ。

決してわたしを不幸への道へ滑り込ませてはならぬ。

常にわたしの中のそなたの勢力を維持し

わが想いを自由なままにし

わたしが死ぬまでその力を放棄してはならぬ。

だが、わたしの想いには言葉を諦めさせてほしい。

来れ、漆黒の夜よ、悲しみに一番似合う夜よ。  
光よ、快活な気分にあふさわしいその明るさを棄てよ。  
暗闇こそ苦しみに喘ぐわたしに真になんかっている  
不在が力を発揮して陽気になれないわたしに。

木々は<sup>こうべ</sup>頭をたれて爽やかな夏の過ぎゆくを  
惜しみ、死人の色をした枯れ葉を  
散らして、満腔の悲しみを演じる。  
それほどに、ああ、木々は悲しみを強要されるのだ。

こうして枯れ葉から夏の告別の絨毯が織り上げられる。  
葉の落ちた枝々は剥き出しの体となって  
哀悼の意を表す。その色合いは期待を孕む緑から  
衰えて、愛しながら涸れていく。

木々と枝葉が、不在ゆえに、哀悼者となるのなら  
同じような欠乏に、わたしが嘆くのは、当たり前のこと。

晴れやかな姿を見せて大地を喜ばす太陽が  
朝にその黄金の<sup>かんばせ</sup>顔を現し  
退屈で物憂い夜を追い払い  
その恩寵に包んで世界を幸せにするとき

幸せは一つの場所に留まらないことを示す。  
天はわれらに光を与えるだけでなく  
その朗らかな顔を隠すことがある、長い間ではないが  
その<sup>あまね</sup>遍き力を試すには十分に長い間。

だが、日没もそれほど暗くなく  
無人の荒野もそれほど寂しい影を持たず  
漆黒の暗闇もそれほど不気味ではない  
あの方の不在にわたしが耐えている苦痛ほどは。

太陽の不在はしばしの夜を生むが  
歓びの不在は光を見ることはない。

21

[P 24]

この前あなたを見たとき、あなたにお会いしたのでなかった。  
それはあなたの幻影で、わたしの想いの中で  
とても生き生きと描かれるので、一時なりと心の中で  
わたしが離れることを、それは許してくれない。

眠りはわたしにとっても好意的で  
あなたの愛しい面影がはぐれることを許さない。  
目覚めたわたしが、一瞬うっかりあなたを忘れてしまった  
などと言う口実が見つからないように。

わたしの誠実はさほどに大きく、眠りは親切にも  
喜んであなたをわたしの想いの中に映し出し  
常に真の恋人らしくあなたの顔を心に留める。  
それでいくばくかの歓喜が影絵のごとく生み出される。

わたしの愛を哀れんで、いえ、良心の咎めがあるなら  
報酬をください、あなたその人がわたしの中に住んでいるので。

22

[P 25]

神として崇める太陽に  
肌を焼かれるインド人のように  
わたしは愛神に扱われる、崇めれば崇めるほどに  
愛神の愛顧は薄くなるばかりなのだから。

黒の支援を求め、白の欠乏のみを  
嘆くことのできる人々は恵まれている。  
悲嘆を溜め込んで顔面蒼白、希望がなくて  
希望が途絶えたことを見るだけの、わたしに比べれば。



その上、彼らの犠牲は彼らを選んだ聖者の目の前で  
受納され、わたしの犠牲は価値なき儀式として隠される。  
わたしが供物を捧げる場所を見ることを許したまえ。

心の中に愛神の権力の記章を付けさせたまえ  
彼らが肌に太陽神の光の記章を付けているように。  
わたしが生きている限り、愛神への献納を止めはしない。

23

[ P 26 ]

だれもが愉快的な娯楽へ急ぐ  
狩猟、鷹狩、賭博へと。心地よい語らいを  
楽しむ者もいるし、音楽は楽しみの極致を示す。  
だがわたしはこれらにましてわが想いに軍配を上げる。

わたしの何よりの楽しみは、世間の目を逃れて  
独りごち、人々の暗愚な盲目さに驚き呆れること。  
昼間の活動に気合を入れて、どうにもならず  
あだな自惚れに真の喜びを忘れる人々の。

人々が狩りを楽しむとき、わたしはわが想いを追跡する。  
鷹狩ならば、わたしの心は望ましい目標へ飛揚する。  
語らいならば、わが胸の奥と語らい、すすり泣く  
人々が楽の音を最高の雅致と見なすとき。

ああ神様、これらの愚かな楽しみ事は人の心を動かせますか。  
それとも音楽は愛の甘やかな想いの中にのみあるのですか。

24

[ P 27 ]

老いた父親が息子に諭すのをかつて聞いたことがある  
息子は殊勝にも耳を澄まし、熟年と聡い経験が  
危惧への疑惑あるいは理性の裏切りから  
晴らしてくれることに聴き入った。

「息子よ」父は言う、「父の白髪頭を見よ。  
わしも昔はお前のように潑刺といたいけな時があり  
恐れを知らず、陽気に遊び戯れたものだ。  
だが若い時の過ちゆえにあまりに早く衰えた。

「わしも昔は恋をした、お前と同じく恋人を気遣い  
憎らしい嫉妬の糸に導かれ  
保とうと努めてかえって自由を失い  
悲嘆を手に入れた、それが常にわしの悲しみを誘うのだ。

「手遅れになる前に愛を避けよ、愛は罪ではないが  
若き日には疑惑、老いては悔恨を生み出すゆえに。」

#### ソング 4

[P28]

最愛の御方、戻っていらして  
いつまでも長居して  
歓喜を殺し苦痛を押しつけ  
悲しみを先導しないで。  
こんなに離れ離れではいけない  
愛と不在は決して折り合わない。

どうしても出立し  
わたしを不幸なままにするのなら  
裏切ることを知らない  
わたしの心を旅へ連れて行って。  
わたしの心はあなたのもの、あなたの許へ飛んでいく  
愛しいあなたの眼を見る喜びに。

私たちは離れていても離れない  
たがいには不在ではあるけれど。  
時間も場所も最大の傷心も  
わたしの絆を解けない。  
わたしは繋がれてはいるが、それが利得と考える  
そんな縛りには苦痛は感じない。

だがわたしは生きているのか  
わたしの主要な部分を失っても。  
心は飛び去り、視力は妨げられ  
これがわたしの宿命なのか。  
愛しい心よ、行って、すぐに戻っておいで  
ここでと同じく彼の地で燃えるために。

25

[P 29]

貧しい眼よ、盲目になれ、あの光をもう見るな  
そなたの大切な喜びの元、あの光は行ってしまった  
大きな力と権力に奪取され  
そなたの損失を他の者たちの利得として貯えた。

汜濫し溺れよ、眼があのだらかな星を  
取り戻すまで。そして憎らしい意地悪で  
涙の洪水を送り込み、あらゆる視力と視線を  
抹消せよ。あんなに楽しんだ光が今はないのだから。

これらの光線を葬れ、人の心に炎を焚きつけ  
征服した光線を。彼らの愛に燃える心は自らを  
あの御方に委ねるが、利得とは評価されない。

あの輝かしい星が、最も清らかに輝く時  
火星より明るいあの星が今一度現れるまで  
見るでない。その時に星の力でそなたは贖われよう。

26

[P 30]

愛しい御方、この心を、そしてわたしの魂の意向を大切にしてください。  
逃げ出したからといって、なじらないで。  
ああ、それは哀れなわたしの許を去り、あなたの胸を選んだの  
いつまでも住処としたい聖なる神殿として。

だから好意を示して、つれなく抹殺しないで

あなたへ逃げたその心を。よいものを目指して  
悪いものを拒絶した心を大目に見てください。  
わたしは満足、心がなくてわたしの命は危ういけれど。

あなたが心優しく義を重んじる御方なら  
あなたの御心を届けてほしい、わたしの所に来れば  
あなたへの献身に縛られた誠実な愛を糧とするでしょう。

そこで清純で汚れない愛の儀式が執り行われるのを  
眼にするでしょう、魂と肉体が一つに結ばれている限り  
決して色あせることない愛の儀式が。

27

[P31]

ええい、のろまの希望め、なぜいつも逆らってばかりなの。  
おもねるだけでは事足りなくて  
呪文を唱えて抜け目なくどう裏切ろうかと  
画策する。これがお前の戦利品に違いない。

わたしはお前から花のある甘い果実を受けるのを期待したが  
お前の花は散れば枯れてしまい  
ふんだんにその手から配られた喜びの品は  
萎れて褪せた。至福と思えたものが地獄なのだ。

どんな町もこれにまさる謀略で占拠されたためしはない  
お前がわたしに仕掛けた謀略ほどは。お前はわたしを滅ぼした  
あの火の燃えさしでわたしの運命を描くのだ。

こうして希望よ、欺瞞のゆえにお前は裁判にかけられる。  
お前は裁判に甘んじるのが嫌なようだが  
瀬戸際には真実を証明し、自由放免を獲得するのだ。

28

[P32]

悲嘆よ、殺人者の悲嘆よ、わたしの苦悶はすでに

十分に大きくはないのか。なのにお前はますます  
わたしの禍を増し、得意がる。  
悲痛は今過ぎたばかりなのに、また新たに始まるのか。

わたしはお前が稼げる唯一の獲物なのか。  
絶望を嫌というほど味わうよう定められたのか。  
不幸の丘に登るのが一番ふさわしいのか  
喜びの原に安住できないわたしは。

そうであるなら、悲嘆よ、賓客として歓迎します  
わたしが苦しめば、あの方は安らかでいられるので。  
でも、悲嘆よ、このことだけは懇願させてほしい

常にお前の力を振るうのはよいが、わたしの愛する人々からの  
苦痛や苦悩をわたしに味わわせないで。  
これらを免れる限り、あらゆる重荷を押し付けて構わない。

29

[P 33]

ここから立ち去れ、喜びよ、もはや止まってはならぬ。  
お前の快感は大きすぎて、絶望が直視するに  
耐えられぬ。喪失がわたしのいまの境遇  
つい先頃までもっとましな境遇を当てにしていたのに。

愚か者め、何としばしば天相の様変わりをこの目で見えて来たことか  
わたしの宿命を気にかけることができる前に。  
だが今や時は過ぎ、気づくのが遅すぎた  
いっそうきつく縛られた悲しみのほかは何もない今は。

その視線がわたしに歓びを与えた太陽を享受していたときは  
昼間が終わるはずはあるまいと高をくくったいたが  
まもなく夜が太陽不在の暗い服を着てやって来た

あの方の不在は胆汁あるいは死より惨めで苦々しい  
不在が真の恋人たちを襲うとき、真の愛の炎は

被い尽くされ、侮蔑の貧しい炎に息の根を止められる。

30

[P 34]

わたしに穏やかな休息を恵む、そなた祝福された暗闇よ、  
証人になっておくれ。死がわたしの眼を閉ざし  
世俗の束縛からわたしを解放し  
ここから一段と高い場所へと旅支度をするとき

何としばしばそなたの中で圧迫されて横になり  
苦痛のうめき声にして悲惨さを口に出したことか。  
その声は空へと上るが、仕方なく戻って来ては  
わたしの胸を傷つける。

その傷はわたしにもっと大きな危害を与えようとひたすら励む。  
わたしの傷を直すには愛の呪文の他に手立てがない  
愛の呪文のみがまだわたしを救えるのだ。

それが叶わないなら、死神にわたしの苦痛を贖わせよう。  
信頼できる友人たち、無傷のままのわたしの誠実を尊重して  
こんなに哀哭できるわたしなら愛せたはずと証言して。

ソング 5

[P 35]

〈時〉よ、わが不安の唯一の原因よ  
お前によって一度は祝福されると期待したのに  
何と残酷へと心変わりしてしまったの。  
初めはわたしの愛に命を与え、それから  
常に痛々しく燃えていながら、置き去られたり  
変化したりしない歓びをいつも与えたお前は。

わたしが怠りましたか、愛の儀式を一度たりと  
未遂のままにしましたか、だから貴方の激怒と  
辛辣な変貌を仕返しされたのですか。  
いまではわずかでも幸せなときは

一瞬たりと見えません

貴方の愛顧をこんなに遠ざけられては。

わたしの愚かさではなく貴方自らを責めなさい

〈時〉は自らを清浄なものとして与えた。

真の愛はそのような目標を一番愛する。

不躰な愛は利得を求める

有徳の愛は価値を熱望する

他のどんな想いも経験しない。

ならば素早い歩みを止めよ、残酷な〈時〉よ

今一度祝福されたわたしを歓びへと

登らせよ、お前を称えることができるように。

快樂を甘く味わい、誠実を無駄にすることなく

愛の歓びに浸らせよ、さすればお前を

名声の翼へ引き上げてあげよう。

貴方の栄光は決して滅びない、貴方が自らを破滅させ

〈時〉に終末を与えるその時まで。

そのとき〈時〉はもはや生きることはない。

そのような時間を貸与するのは利得だ

さすればお前の名声は途絶えることがなく

名声が与えるものを楽しむのだから。

31

[P36]

飽きるくらいのろのろと愛の不安の

長い苦難をなめた後、苦痛を癒そうと横になり

休息を願うが、新たな苦悶に取り憑かれ

それにかしずかねばならなくなった。

そのとき〈運命〉がやって来て、眼は見えずとも歩みを止め

幸いな腕を回してわたしを搦め捕った。

悲嘆に凍えたわたしは暖かみが手に入ろうとは、歓びを

朽ちさせたその氷を溶かす暖かみなどは一切考えなかった。

やがて〈運命〉が言うには「〈報酬〉が真の恋人たちの召使  
わたしを介してそなたに歓びを遣わす。  
疑惑の雲を悉く追い払い、不安をすべて払拭し  
〈運命〉に、愛神に<sup>すが</sup>縋るのだ」と。

わたしは言い付けに従い、立ち上がりながら感じた  
愛は、愛に心が一番動かなかったとき、最高であったと。

32

[P 37]

おお〈時〉よ、愛神の迅速な翼に乗って何と敏捷に歓びの  
希望へと飛んで行くのか、それはわれらの欲望に媚を売り  
恋する者に常に満足をもたらすが  
われらが歓ぶはずのときに、お前は引っ込んでしまう。

偽りの〈時〉、お前はわれらの思いが叶わぬよう歩みを止める  
その時お前は驚の翼を駆ってわれらの不幸へ急ぐ。  
お前の退去をゆっくりと見せるのは、悲しみを運ぶ  
絶望と危難をわれらに与えるためだったのだ。

おお、歩みを緩めよ、穏やかに愛神の許へ下れ  
蜜蜂のごとくふるまえ、蜂が翼を使うのは  
主人にひたすら役立とうと利得を住处に運ぶため  
苦しく辛い、何度も続ける。

お前も甘い歓びの蜜を抱え切れぬほど背負い  
愛の巣箱、わたしを破滅させないで。

33

[P 38]

哀れな愛神よ、そなたはどれだけの眼を持っているのか  
最も望ましい憧憬と目標からそなたを見張って制するための。  
そなたが盲目だと噂する者がいるからなのか  
視力を阻まれてどんな幸せにも奉仕しないのは。



だれがそなたをそうだと非難しても、法の正義はまかり通らぬ  
そなたと太陽との間には何ら厳然たる問題はなく  
太陽の視線は外へ向かい、そなたは心をその気にさせて  
自在に操るのだから。こうしてそなたは掛け金を外され

しかるにわれらは盲いて厚かましく、われらに  
非がある危難をしばしばそなたに押しかぶせる  
愚かさと盲いた向こう見ずに導かれ  
そなたの聖なる力を子供<sup>なぞら</sup>の力に準えて。

だが愛神よ、この傲慢不遜を許してほしい。そなたを  
崇めねばならぬ、さもないと恋の火を持たずに生まれてしまう。

34

[P39]

わが眼よ、気をつけるのだ、お前の視線をどこに投げるかに  
眼が心を裏切って最奥の考えをばらしてしまわぬように。  
お前自体に忠実であれ、疑惑ほど高くつく買い物はない  
それは恋する者の愛情を餓死させてしまうゆえ。

嫉妬深い衆目の注視する眼を通り過ぎないうちに捉えよ  
あるいはお前の眼、愛する方がお前の熱情の華を求める  
所に固定された眼を。その眼に犯した過誤を悟らせよ  
落ちた恥にこれ以上尽くしてはならないと。

ならば見るのだ、歎びを胸に。お前の傷を  
偽善の目的で調べた者どもが征服されたがゆえに。  
お前が誠実である限り、彼らの眼を見えなくして  
注視、凝視、注目させよ、狂気に走るまで。

しかるにわが眼よ、お前は愛の全貌を見て楽しみ  
そのような幸福感に誘われて満足するのだ。

35

[P 40]

偽りの希望め、滅ぼすために養い、初め育てたものを  
打ち滅ぼすお前は。殺すために孕むとは  
生み育てる子宮には不自然なこと。  
お前が多くを与えるのはより大きな不足を生むため。

暴君と同じだ。不正にこの世を治め  
<sup>そとづら</sup>外面は善人ぶって、やがては処刑される運命の  
人々の立身出世を精一杯<sup>はか</sup>諮ってやるが  
望みが叶った人々を待ち受けるのは大きな没落。

こうして希望と暴君は邪悪卑劣な意図を隠し  
悪に善の彩りを施し  
悪事は華麗な見世物の中で犯される。  
希望は心を殺し、暴君は血を流す。

まやかしの希望は欲望の絶頂へと登らせて  
一気にわれらを滑り落とすのだ。

36

[P 41]

哀れな心、そなたはわたしが愛せることの何と巧みな証人か。  
何としばしばわたしの悲嘆がそなたに涙を、一番大切な  
血の滴<sup>しずく</sup>を流させたことか。そなたが耐えた恐れが  
どんなに度々わたしがなめた苦痛の証人であることか。

どんな苦悶を受けたのか、歓びが及ばぬほど  
憧れが孕む拷問台で激しく責められ  
希求が育てる欲望に苦しむそなたは。  
愛の誠に一途、貞節に終始するがために。

愛は確かではありえないと言われる  
情熱の影がわずかししか認められない所では。  
その時に心の最大の痛みは、愛を見るべきただ一人の御方を除いて  
だれの眼からも愛を隠さねばならぬこと。

わたしの心の中では、見せかけの愛を誇る百万の心より  
大きな情熱がかき立てられていると知れ。

ソング 6

[P42]

清浄な幸せな眼よ

そなたはその支配の場で

喜悅と恥辱の両方を授ける力を持つ。

その光は誘惑し縛り付ける

あらゆる心をその命令へと。

おお、わたしを凝視なさい、そなたが成すがままの。

わたしの命を支配するのは、あなたの眼。

わたしの慰めを与えるのは、あなたの眼。

蔑んでわたしの終焉を駆り立てないで。

眉間に不和の皺を寄せて

眼の光を陰らさないで

輝いているとき、それは真の愛の歓びなのに。

ご覧なさい、夜が現れ

太陽が勢力を失うとき

太陽の敗北がどれほど歓びを奪うかを。

太陽が輝き、天から

夜の雲を一掃するとき

われらの熟視する視線がどんなに幸せになることか。

太陽の晴れやかな光より

そなたの熱視線ははるかに強い。

その心地よい眼差しは縛りまた自由にする。

なぜ哀れなわたしに意地悪をして

わたしが歓びを味わう

唯一の楽しみをだめにするの。

ならば輝け、おお、最愛の光よ

愛顧と情愛とで。

どんな口実もあなたの眉間の皺の口実となさるな。  
魂の歎きであるかのように  
わたしのその時祝福された眼を祝福してください  
それは真の愛情をあなたに結ぶのだから。

その時太陽は、そなたのもっと大きな力に  
席を譲る、そなたの方がもっと完璧な光を  
照らすと譲歩して。  
おお、その時には寵愛を授けてください  
あなたの愛に手足を縛られた奴隷に  
あなたに愛の誠を捧げたわたしに光を注ぐことで。

眉を<sup>ひそ</sup>顰めたくなればたら  
その殺人者の眼を、不実と欺瞞を  
事とする輩にお使いなさい。  
でも、愛しい御方、わたしには投げてほしい  
真の憧れのご褒美に、偽りの愛の炎の思いをすべて  
追放する魅惑的な眼差しを。

37

[P 43]

夜よ、よく来た、わたしの悩ましい心には歓迎だ。  
暗く陰気で物悲しいが、わたしよりはまだましだ。  
お前の気分、これほど憂鬱なわたし以上に  
ふさわしい連れ合いは決して見つからぬ。

夜が暗いなら、いまだ是正されない私への悪事は  
決して光が見えないし、一握りの至福さえ垣間見えない。  
陰気なら、喜悅はわたしから素早く遠ざかるし  
憂慮は静かな休息への望みを出し抜く。

だから幸なきわたしと友情の絆を結ぼう  
お前が最高に物悲しく暗いとき、それがわたしだ  
人生のあらゆる快樂、歡喜を嫌うわたしだ。

お前と並んで、沈黙と悲嘆をわたしは最高に愛する。  
お前たち三人組から逃げられないのだ。  
ならば内輪もめしないで仲良く暮らそう。

38

[ P 44 ]

追放された生き者にどんな楽しみがあらう  
知恵や学識で考案されたどんな娯楽に  
興じても。不在が住処を懇願する  
あらゆる平安と抗戦するから。

悲惨にお似合いの墓を歓迎して飲べるだけなのか。  
そこに苦勞を埋め、嫌な連中から  
遠ざかれる、娯楽が与える歡樂の弦を  
いつも耳障りに軋ませる連中から。

歡びに精通する部分は心である。  
心が家出すれば、歡びはどんな歡びを授けられよう  
歡喜を感じる者が無感覺なとき。

ああ、わたしは追放され、どんな幸福も見出せず  
わたしの境遇は悲惨と結ぶ宿命  
悲惨がなければ、歡びを生み出したはずなのに。

39

[ P 45 ]

わたしが歡樂に委ねられたら、こうして最高の歡びを  
奪われていることはいっそう不都合でしょう。  
わたしは最大の喪失に黙して耐えます  
悲しみに慣れた者を、悲嘆は滅ぼしはしないから。

派手な言葉を操る宮廷詩人とは違い、わたしが組み立てた  
詩行を楽しめません、そんなものは純粹な想いの滓  
表面に生えた苔としか見なせない。なのにあの人たちは  
機知の病にかかり一所懸命言葉を吐き出そうとする。

ああ、思うにあなたの豊饒はあなたの欠乏の証明。  
感情が有り余る所では、言葉は一番不足するもの。  
わたしを許して、生きて精一杯飲びを甘受しなさい。

無視されたわたしが恨みを示しても、嫌がらないで。  
わたしが嫌みに思うのは、あなたではないの。  
幸せを阻まれて、だれかをわたしと同じ境遇にしたいの。

40

[P 46]

哀れな道化どもが愛と見なすものは愛ではない。  
口づけやいちゃつきの愚かしい上辺のみの見せかけや  
口当たりのいいごまかしで、そう見えるだけ。  
断じてそんなものは愛神への敬意からほど遠い。

ああ、それらは失われた愛を回復したり、勝ち得ても  
愛の選ばれた痛撃を保持することは出来ない。  
しばしば顔と目付きで愛神は人を打倒するが  
そんな些細な征服は愛神には似合わない。

誰が本当に愛しているかを示すのは、寵愛から滑り落ちるとき  
偽りの愛の疾風が強めたり静めたりするような  
嘆息や涙の芸当ではない。

真の愛は魂の中で安全に安らぐ  
常に人気のない場所へと急ぐ誠実に守られて。  
とはいえ、優しい眼差しには多くの祝福が隠されている。

41

[P 47]

天の栄光を表し、美しい輝きに  
われらの眼を見張らせる祝福された星星よ。  
妬んではならぬ、この地上でわたしの中に  
もっと大きな火を燃やす御姿を享受するからと言って。

わたしは告白する、そのような美は欲望を生むと。

そなたは輝いて清らかな光をわれらに授けるが  
地上の御方はわたしの愛する魂に、彼の寵愛を知れと  
暖かさを吹き込んで下さる。

そなたと同じく清澄で鮮やかで光り輝くが、この御方は  
わたしの歓びの光、確固として不動、わたしから光を  
取り上げることなく、わたしも彼の愛から外れず  
絶えず増して、わたしの至福を高めてくれる。

彼の視線はわたしの愛に支配された眼に命を与える。  
わたしの愛は満ち足りている、愛は彼の中に宿るゆえ。

42

[ P 48 ]

愛神が人間の胸の内で勢力を振るうことがあるなら  
愁いに沈む心の中を自在に動くことができるなら  
その熱が歓びの不安をもたらず炎を生み出す力を  
あるいは授けることができるなら

わたしをご覧なさい、わたしこそこれらの格好の見本です。  
わたしは、最大の疼きを感じる魂。  
わたしは、心が旅立って心のない体。  
わたしは、愛と悲嘆に押し潰されたその者。

愛神が盲目であることの真実を誰一人  
感じなかった、わたしが至福を奪われたときまで。  
眼が見えていたら、憐れみを示したに違いないから。

悲惨な厄災が大見得を切る苦悶の舞台に  
わたしは成るはずではなかった。  
ああ違う、きっとあの方は大きな憐情を抱いて下さったろう。

ソング 1

[P 49]

悲しみよ、降参だ、わたしがしくじったことを哀哭する。  
お前の激怒はこれでは満たされないのか。

けしからぬ悪魔のお前は

わたしを不幸にした。

まだわたしから離れることに甘んぜず、お前の呪われた  
悪魔の手管をいかに発揮しようかと抗うのか。

わたしは嘆き、死にかかっている。これ以上何が望みだ。  
わたしの魂はこの呪われた岸辺を出る機会を伺う。

そこには危難のみが流れ

それでわたしは思い知る

わたしの人生の不安の一番悲しい時間を  
悲嘆の重荷を掛けられて草臥れた一瞬一瞬を。

だがこれだけではお前の怨恨を和らげはしまい。  
わたしの最後の夜以外の何も安楽をもたらしはしない。

ならば手早くそうしてほしい

不幸なわたしの眼に映る間

恋人たちに至福を叶えることをこんなに洩る〈時〉が  
損失の分だけ悲嘆が軽くはならないと確かめるであろうその姿が。

永続する悲嘆を途絶えさせず

安堵のないまま、限りなくそのようにしてほしい

わたしが昔与<sup>あず</sup>かった愛神の

寵愛を再び物にするために。

わたしが最後を迎えることで愛神を歓ばせて、死にかけた  
わたしは彼を怒らせてしまったから、不本意なことに。

43

[P 50]

おお、最愛の眼よ、愛の光、愛の案内人  
盲いて生まれたが、眼の明るいきらめきに  
凱旋を結わえるキューピッドの歓び。  
貴方の眼の中に彼の栄光が現れるゆえ。



幸いなるかな、そなたが天で生まれた光を試す  
それらの場所は。その光は太陽の妬み嫉みを  
かき立てる、太陽はそんなに長く照らして来たのに  
そなたの眩い光が空の彼の光線に匹敵するがゆえ。

だがいまや、ああ、そなたの光はここで禁じられ  
暗闇が哀れ光を失った部屋を占拠するに違いない。  
祝福された光は全てこれからは隠されてしまい  
暗闇の黒い行為がのさばるようになる。

なぜ天はほんとにわずかな光さえ授けたまうのか  
わたしを惨めにするためにそんな暗闇を選んだ人々の眼に。

44

[ P51 ]

おお、春よ、何と爽やかな駆け足で  
目の前を流れるお前の水流を捕まえ  
もっと大きな河の歓迎を受けようと急ぐのか  
これら生まれたての小川がこれらの場所を洗わないうちに。

だがお前のやり方は賢明だ、ここに留まればわたしの涙で増えて  
危険な洪水となり、甘やかな河原に氾濫するやも知れない。  
だがわたしの難儀を避ける方がより巧みなやり方  
難儀ゆえの涙が川となりお前の最速の流れを追いかけるので。

一番巧いやり方は、見事な急ぎ足でわたしの困窮から  
逃げる時。困窮はいまわたしその人を追い越す  
わたしの破れた心は悲しみを満載して生命の血が  
全く無駄に浪費されるそんな悲哀を証言できるのに。

清々しい春よ、だからお前の道を固守し、むだ足を踏んではならぬ。  
さすればわたしの災いの日々、あるいは悲嘆が、粉々に碎かれる。

もう沢山、静かにしてわたしを苦しめるのをやめて  
山のような質問責めにして。落ち着いて  
ただわたしの胸に手を当てて考えさせて  
常に新たな嵐を連れ込んでわたしの魂を引き裂く胸に。

意地悪なあなたはわたしの災いをさらに増そうとなさるのね。  
つむじ曲がりな応え方をするとおっしゃるの、ずっと前に  
真実を告白したわたしが。決して途切れることのないあなたの  
舌鋒鋭い拷問にいつまでも苦しまねばならないの。

それじゃ、その悪魔の訊問を脅えさせる方法は  
これしかないわ。わたしは悪魔に魅入られている  
そして狂った人々は叡知の正当さに気が付かない。

地獄の霊、〈不在〉がわたしの哀れな感覚を全て  
捉えて、彼の残忍な勢力下に置く。  
では容赦して、わたしがわたし自身となり祝福されるまで。

愛神よ、全部お取りなさい、わたしがあなたに定められて  
いるかのように、あなたのものにしてしまったのだから。  
あなたが征服したものを受け取りなさい、あなたの木陰を  
求めているわたしをあなたの太陽でこれ以上苦しめないで。

詰め掛けるべき救済の場所がわたしには残されていない。  
わずかな慰安さえ与えてくれそうな誰の顔も見えない。  
だが苦痛は増すばかりで、こんな方法では  
愛は和らがないとただ分かったのみ。

暑く喉が渴いて、わたしはとある泉へやって来た  
わたしの炎をいくらかは癒せると当てにして。  
だがそこでわたしは愛に新たに抱き締められた。

水は飲めず、泉の中にわたしは見た

泉と同じくわたしその人が生きた水鏡となっているのを。

愛神は自ら覗き込む、正しい位置にあるかどうかを。

47

[ P 54 ]

止めよ、わが眼よ、甲斐のない涙を流すのは

取り戻そうとする希望<sup>のぞみ</sup>は尽きた

失えば、苦痛を生み出すあの宝物を。

お前の恐れをこんなに哀れに表すことを止めるのだ。

泣くのはあまりに子供じみている、そんな惨めな

戦利品には釣り合わぬ高い力を悲嘆が育む所では

嘆息も悲痛もこうして無駄に費やされるから。

真の悲しみは決して上辺の嘆き<sup>てら</sup>を銜わない。

わたしの言うことを聞いて、残りの涙は貯めて置きなさい

これ以上一滴も収める部屋がなくなるまで。

そしたら涙のその海で不幸なわたしを溺れさせなさい。

嘆息をたくさん貯えましょう、その一部だけで

無敵の心を打ち破るのに十分なほどに。

これがやれば、わたしたちは苦痛から解放される。

48

[ P 55 ]

炎のように、愛はわたしの中で燃え盛る

長く燃えれば燃えるほど、勢いを増し

より大きく、清らかに、輝かしく、これ以上の

驚異を人の眼に植え付けはしない。愛の炎が

一番の望みのままにわたしの胸を自在に操るとき

希望は常にわたしの胸に育まれる。

そしていまやそれほど強大な熱を冷ますのは

出来ない相談だ、愛神がその力を監視する所では。

わたしの眼はその炎を支えられない、わたしの心は  
炎を信頼して情熱を分け与え  
思いやつれながらどうにか愛を示そうとする。

わたしの息はわたしの傷を焚き付けて増え続ける  
燃料のわずかな一部さえ吐き出せない。  
それでもわたしは愛する、燃え殻となるまで。

《パンフィリア》

ソネット

[ P 56 ]

悲しみは最愛のあなたの胸から望み得る限り遠ざけてしまいたい  
あるいはわたしの意のままにその根を取り除きたい。  
そうして悲しみは追放され、甘美な休息が愛の力で  
定められる、喜ばす満足を与えるように。

あなたの心につかみ掛かるそれらの侮蔑を  
二倍にして送り返しその女の魂<sup>ひと</sup>の不安を引き出しなさい。  
真の愛は愛する人を不機嫌にしないし  
愛する人の心にはなるべく傷がつかないように計らうから。

でも愛にはしばしば思い違いが付き物。  
思い違いが物事の成否を明らかにする際に正確と  
見えようと、常に真実が一途な力で統治し続ければ  
あなたは人も羨む悦楽を体験するでしょう。

あなたに僅かな侮蔑さえ表さない女、わたしの考えを言えば  
軽蔑と嫌悪で悶えて、あんな女の心は引き裂かれればよい。

ソング

[ P 57 ]

ああ、別れの時が来た  
別れとともにわたしの命を抹殺する傷が。  
あだな望みよ、わたしから離れよ、愛しい御方は行かねばならぬ  
もっと大きな悦びに会うため、そしてわたしは大きな悲痛に。

何処でなりと腹一杯の歓楽をお楽しみなさい

邪悪さに苦しむのは一人でたくさん。

わたしの心は悲しみに慣れているので

新たな悲嘆に傷つき方が巧みなの。

天が自らの似姿に造りたまいたあなたは

悲哀の影に座ることは決してあってはならない。

わたしは孤独のまま嘆きつつ終わる

悲嘆の人生を送るべく生まれたわたしは。

わたしの最速の歩みは、悲痛へ傾き

歓びがわたしに住み着く時間は極めて限られていた

ことを示す、わたしの中には苦悩が居を定め

その残忍な呪文でわたしを魅入るに違いない。

だが苦悩が魔術を試すとき

わたしに死を望ませるに過ぎない。

わたしの愛の誠を曲げられないうちに

恐ろしい暗闇をわたしは彷徨<sup>さまよ</sup>おう。

### ソング

[P58]

言ってヴィナス、わたしがどれだけ長く愛して来たか、ここであなたに仕えて  
来たかを。

なのにわたしの情熱は蔑まれ疑われる、一点の曇りもないのに。

ああ、愛は愛に相應しいと考えて、あなたが愛した覚えがあるなら

わたしの苦痛を熟視して、そしてあなたも同じ経験をしたかどうか振り返っ  
て見て。

あなたが欲望の女神であることを、そしてあなたの聖なる力が

この炎に触れ感じたことがあることを思い出して。

わたしの中のこれらの炎を止むように諭して、あるいは愛の

激しい暴風雨に襲われている哀れなわたしの炎を癒して。

不安な夜はわたしに代わってわたしがどんなに愛しているか表してくれる。

わたしの偽らない嘆息はわたしの誠実な心の証人。

わたしの愁いに沈む表情はわたしの魂が耐えている悲嘆を示す。

なのにこれらの苦悶はあなたの手からどんな救助も得られない。

あなたのあのわがままな息子にあなたの権利を渡すように、そして

彼の弓矢をあなたの美しい視線に譲るように命令して

歓びの眼、愛の心を持つあなたに。

その時新たな希望が生まれ、憐憫をかき立てられるように。

息子に勝ち誇らせてはならぬ、傷つけるも救うも思いのままと。

まして自慢させてはならぬ、あなたその人に愛の傷を与えたと。

息子を抑えなさい、さもないとどうして幸運が期待できるの。

あなたを傷つけた人だから、ああ、わたしを殺すかもしれないのに。

### ソング

[ P 59 ]

だれよりも挫折したわたし

あなたの愛を持ちかけて、持ったが、なくしたわたしは

嘆き節を呟くのは当然のこと

愛は愛を生み、愛の苦しみを生むから。

わたしの愛の炎を静めるため

わたしが一番望んだものを

持つかもしれない、だがいまそれが無いのに気づかねばならない

別の女の支配者が存在するので。

支配者など持たねばよかった

あるいはそんな不正な奉仕など。

そしたら至福に恵まれて味わえただろう

いまわたしの希望を滅ぼさんとする悦楽を。

その望まれた悦楽が手に入れば

この上なく快適な運命が訪れる。

最上のものを味わえないわたしは

食べながら飢えて、不安な休息を貪<sup>むさぼ</sup>らねばならない。

ソング

[ P 60 ]

「愛は誠実な羊飼の胸に  
その住処を作る  
王侯方の胸にと同じく。だが彼らの想いは  
急流に似て一刻も留まらぬ。

「変化は、彼らの心には最上の糧となるが  
羊飼には心配の種  
彼の愛が抜きん出るとき  
彼の誠こそ最高に贅沢な糧と考える。

「美は、わずかに差し招くが  
彼の心を変化へと誘惑できない。  
一途さこそ彼の最大の歓び  
奇妙な妄想から逃げようと努める。

「白皙金髪は彼には快感ではない  
彼の恋する人のものでなければ。  
彼女の微笑みの魅力でなければ  
宝でもなんでもない。」

このように羊飼は昔告白した  
立派に愛したが愛されなかった羊飼は。  
侮蔑と悲嘆で押し潰されても  
心変わりはいしなかった。

羊飼はこうして心満ち足りた  
愛は報われなかったが。  
この辛い境遇を後悔しなかった  
最高の恋人たちは最悪を乗り切るものだから。

ソング

[ P 61 ]

最愛の御方、もしわたしにその資格があつて  
あなたの心の片隅にわたしへの愛を置いてと求められるなら

それをいつまでも楽しませて  
愛の誠を減ぼさないで  
愛が生きて活動する所でそれを哀れんでください。

新しい愛に誘惑されて  
こんなに長く仕えて来たわたしを捨てないで  
あなたの御力を衰えさせず  
純然とわたしの上に照り渡らせて  
愛の忠誠をひとえに守って来たわたしに。

一度でもわたしの心が道を外れることがあったなら  
あなたの心変わりを責めはしません。  
常に一途なままなら  
心変わりは必ずや殺すことになる  
<sup>さまよ</sup>彷徨うことを知らない魂の持ち主を。

まだ愛の優しい微笑みを取り戻すことはできます  
愛は完全に失われたわけではないから。  
でも愛神をあまりに長く試さないで  
大きな悪事にあまりに道を  
阻まれ過ぎていると考え込んでしまわないように。

### ソング

[P 62]

最高に麗しく常に真実を語る眼よ  
お前はわたしの欲望の光でありつつ  
密偵でもあるのか。  
お前は愛の歓びのために清澄に輝きながら  
遺恨と嫉妬の炎を  
生み出すことができるのか。

お前がどんな顔を凝視しているのかとくと見よ  
お前からの愛に欠けていると  
嫉妬が語る顔だ。  
それらの顔が疑惑にきらめく様を見よ



不正な想いの熱で生まれ  
沸き立つそれらの顔が。

あなたの進む道を巧みに導く術を学びなさい  
あなたの眼で心の中を覗き見て  
忍耐をなさい  
無益な嫉妬が他の女の不在によって  
安全にあなたが見たいものを  
受け入れる許可をくれるまで。

その時、愛神に凱旋式を挙行させなさい  
疑惑には動き回れない  
墓を与えなさい。  
その間に望まれた自由は至福を連れて来る  
あらゆる歓びの存在を享受するという至福を  
綺麗な心で愛することの幸せを。

ソネット 1

[ P 63 ]

夜になってもいくばくかの光は見える  
月が喜び勇んでその顔を現し  
太陽の代わりにその光と優美を授けるとき。  
そうでなければどんなに沈んだ夜になることか。

わたしの境遇も同じこと。真の歓びを阻まれ  
冷たく、この見慣れぬ場所に似て覚束なく  
なえ衰え、一瞬のうちに様変わりし  
歓びの絶頂にあっても憎悪に変わる。

まさしく運命の女神に車輪は預けられたのだ  
女神の寵愛は気まぐれで移り気な千鳥足  
変化と突然の苦痛を与える歓びに酔っ払う。

悦楽にはしっかりした足場がなく  
常にころころ入れ替わる。われらの最上の希望は潰<sup>つい</sup>えて

この定めを、ああ、恋人たちはしばしば手にする。

ソネット 2

[ P 64 ]

愛神は奇術師のようにやって来て彼の獲物<sup>もてあそ</sup>を弄び  
全ての心を引き付けて自らの魔訶不思議に称賛を浴びる。  
眼のない彼が巧みにも欲望の最高の眼を  
たぶらかすその様を披露して。

手に負えない子供の彼はその炎をとても綺麗に  
偽装できるので、誰にも彼の欺瞞が見破れない。  
何と見事にごまかしをすることか、しかるにわれわれ愚か者は  
彼の暴君ぶりの記章を付け奉仕に徹するとは！

結局、そんなペテンを行って  
眼ではなく我らの心を占拠する。  
人間は狡猾さを使い、敏捷で喜ばしい技で

視線をたぶらかすことが出来るのみだから。  
もし愛神が戯れるなら、彼の利得は我らのなくした意志。  
だが彼の戯れを根っからの子供のわたしたちは拒絶できない。

ソネット 3

[ P 65 ]

最も祝福された夜よ、愛のための幸せな時間。  
恋人たちの木蔭、彼らの愛の歎<sup>しもべ</sup>び  
怨恨から放たれた下僕たちに愛神の君臨する時  
戯れの歎<sup>しもべ</sup>びが働くための希望にあふれる季節よ。

いまお前はお前の栄光の高さを明らかにした  
その楽しい葦笛がアルゴスの百の眼全てを打<sup>ちようちやく</sup>擲して  
死の闇へ送り込み、どの一つも愛を咎め立てできぬよう  
安全な眼とした、あの神の所業さえそれには及ばない。

お前は真の歎<sup>はぐく</sup>びではなく嫉妬を育む女たちの眼を

閉じた、詮索好きな視線を彷徨<sup>さまよ</sup>わせないように。  
しかるに虚しい疑惑は女たちの不信を育て

お前は爽やかな眠りにあらゆる邪推を支配させる。  
そうしないと邪推は女たちの密かな不安を無視せず  
盲いも不正も共に掻き抱くであろう。

ソネット 4

[P66]

残酷な疑惑よ、おお、いまは静かにしていて。  
日々の苦悶に席を譲り、お前は安らぎなさい。  
ああ、わたしの苦難を易々とお前の餌食にしないで  
憤怒の手綱を緩めないで、愛が圧迫されているときに。

わたしは憂慮に十二分に苦しめられた。  
どんな拷問台とてわたしの心をこれ以上は引き伸ばせぬ。  
わたしには見つからぬ、ちっぽけな満足が  
歓びへの幸いな一歩、祝福の一歩を休める方法が。

なのにお前は貪欲な目付きでわたしの終末へ飛翔し  
卑しい嫉妬を使って悲嘆をもたらそうとする。  
おお、何と奇妙な鳥籠にわたしは閉じ込められているのか。

どんな小さな寵愛の印も味わえないまま  
あの方のお心を斟酌<sup>しんしゃく</sup>し、愛の裏切りに眼を向けて  
お心を一々気にしながらわたしの心の状況を整えねばならない。

ソネット 5

[P67]

数え切れぬ夜をわたしは苦しみに耐えて来た  
それは幾年とも思われた  
わたしの不幸は微塵も贖われることがなく  
よりしっかりと安定した悲嘆に縛られるから。

どれだけ長い時間をわたしの悲しい物思いは耐えたことか  
切り刻むような苦痛に。残酷な愛神はそれを何とも思わない

彼にはできたであろうに、これらの苦痛を  
悲しみの歳月を、確かな歓びへと救い上げることが。

<sup>いたずら</sup>悪戯な子供の愛神が最初に征服した者を救う配慮を  
持っていたなら、このわたしの悦楽の墓場は  
わたしの悲哀の証人として存在しなかったであろう。

わたしは喜悅の画像となっていたであろうが  
今は悲惨な不遇の怨恨を表す墓場  
愛神が無慈悲にも報酬としてそれを示す。

ソネット 6

[ P 68 ]

わたしの苦痛はわたしの痛ましい胸に常にくすぶり  
安楽を求めるが、出口が見つからない  
この歓迎されざる客を排出するための。  
わたしが懸命に抗うと、苦痛の重荷はますますしっかり絡み付く。

風に流されてグッドウィンの浅瀬に乗り上げた船に似て  
抗えば抗うほど砂州の中へ深くのめり込み  
やがて海の藻くずとなる。同じくわたしもこのように  
不安ゆえに沈み、食らわれ、飲み込まれ

失われ、難破し、破壊され、ほんの僅かな望みを阻まれ  
歓びの<sup>ひとか</sup>一欠けらさえ残らない、想いが彷徨える  
範囲が持つことを除いては。ならばわが想いよ、行って叫ぶのだ

希望は潰え、愛は嵐に打ち碎かれ、悦びは遭難したと。  
人を切り刻む絶望がこれらの祝福を全て阻んだが  
誠実はなおも叫ぶ、愛神は決して裏切らないと。

ソネット 7

[ P 69 ]

終わりだ、浅はかな嫉妬よ、ああ、わたしは知った  
お前の秘匿された最奥の手口を。

お前は新作を捏造することはできない、できるのは、  
わたしがすでに見て苦しみつつ感じたその一部のみだ。

お前の欺瞞、偽りの衣装でわたしの信頼を得た欺瞞を  
真実がわたしの心を支配していたとき  
喜び勇んで抱き締め、わたしの傷をその流れが  
至福と共に溢れ出る喜びの源と勘違いしたのだ。

わたしは思った、口実が本当の理由であって  
いかなる虚偽もあなたの口から出てくるはずはないと。  
正直な心の中で信頼はかくも迅速に作り出される。

だがいまあなたのお上手と手練手管を思い知る  
それにたぶらかされて便々とわたしはあなたの意志に従った。  
こうして奴隷になることで世事を一つ習得したのだ。

ソネット 8

[P70]

哀れにも愛神が盗っ人のように鎖と足かせを嵌められて  
連行されるのを目撃した、貞節なディアナの捕虜として。  
無益な苦痛を得意がる無教養なその若者が  
自分からどんな慰藉も受けてならぬと誓いを立てられて。

ディアナは若者をこそ泥と呼んだ。誓約を添えて若者は断言する  
盗んだことなどないが、ただほんの僅かな悲嘆が  
自分の力を侮る人々に下されたことはある  
その復讐には己の名誉の大事がかかっていたのだと。

ディアナは訴える、若者は殺人を犯したゆえ死なねばならぬと。  
若者は愛を焚き付けたが、危害を加えたことはなかった。  
だがディアナが若者にこうして説教をしている間に

ニンフたちが若者の縄を解き、鎖を外した  
安全だと思って。しかるに解き放たれた若者は  
彼女らを嘲弄侮蔑して、森へと逃散した。  
ちようさん

ソネット 9

[P71]

お願い、「行かなければ」なんて言葉を使わないで。

ああ、わたしに災いが訪れると予告しないで  
わたしの憂慮をわたしの歓びの墓場にしないで  
わたしの喪失には喪失のみをあてがって。

さらに辛い喪失の原因を作らないで

受苦の悲しい定めゆえ至福を感じない  
わたしに。恋煩いはあらゆる悦楽を征服し  
喪失させる、悲嘆は悦楽を生まないから。

不幸をいますぐ送り込んで。

そうなければわたしに悲しみの罰を与えないで。  
わたしに災いを知らさないで

前以て知って、多くの苦勞と骨折りで愛神が

報酬として選んだ幸せを悉く失うよりは。  
ともあれいまは楽しんで、それから歓楽に止めを刺すのだ。

ソネット 10

[P72]

〈痴愚〉は是が非でもわたしを恋する女にしてしまう  
恋する想いがどういうものか少しも考えつかなかったとき。  
あるいはわたしを縛り付けてしまう、これらの束縛に  
縛られないでは誰も生きていけないと諭しながら。

うぶなわたしは頷いて、そうして贖われ

恋人たちの奴隸に売られた。  
かつて教えられた愛の虚像への義務は  
自由を求めないそのような束縛。

愛神の力を、愛神がいかにか心を燃え立たせ

力づくで情動を震わせるかを、とくと理解したとき  
わたしは愛して傷つき、常に疲弊することを  
楽しみと思った、〈理性〉はきつく反撥したけれど。

愛神が盲いてやって来てわたしを<sup>しもべ</sup>下僕にしたとき、本当に  
わたしは愛した、なのに理不尽な子供め、あの方は違った。

ソング

[ P 73 ]

恋が芽生える春の季節は  
別れの冬を知らない  
冬霜は希望を減らさず  
夏が来てますます増える。

木々は恋の滞在を教える  
変化に苦痛を感じない木々は。  
冬は木々の葉を減らすが  
夏が来てますます増える。

鳥たちは寒さの中で歌わずに悲しみを  
表すが、春の再来に囀る。  
愛はしばし剪まれて減るが  
夏らしく急速に増える。

一季節のみ恋する人は  
愛と理性を共に裏切る。  
なぜなら理性は望む、愛が減れば  
愛は夏のように増えるべきだと。

愛は時には誤解されるが  
真実は揺るがされない。  
恋の熱はしばし減るが  
夏とともに増える。

恋の初めの春の季節は  
別れの冬を決して見つけず  
希望を減らす霜もなく  
夏らしく常に増え続ける。

ソング

[P74]

子供の愛神は泣いてばかりいる  
宥めれば、すぐに飛び回る  
与えれば、もっと欲しがる  
持っても満足はしない。

彼の欲望には限りがない  
果てしない愚行が彼の宝物  
約束は破る  
彼の言葉は何一つ信用ならない。

彼の誓いの中味は偽物  
うまい口先でたぶらかす  
降参すれば、離れて行き  
騙したことを得意がる。

あなたの嘆きを勝ち誇り  
あなたの躓きの原因となる。  
これらが彼の功德、彼の才能は  
微々たるもの、彼の寵愛は尻軽女のよう。

留まることの確かさは羽に同じ  
餌食への獰猛さは狼の残忍さ。  
子供なので泣くがままにして置いて  
身勝手に飛び回る彼を探すまい。

ソング

[P75]

恋の苦しみをやり過ごし  
〈自由〉は嬉々として動こうとし  
恋の歓びは心地よいが  
その中に安住するのは哀れを誘うと言う。

真底言うには、愛は否応なく  
皆の心を動き回らねばならぬと。



だが恋の歓びは心地よいが  
その中に安住するのは哀れなこと。

愛を愛らしく微かに通せ  
ゆめゆめ深く入らせてはならぬ。  
恋の歓びは心地よいが  
その中に安住するのはたいそう哀れ。

愛神は愛を哀れまぬ  
悦楽よりは悲嘆が動く。  
恋の歓びは心地よいが  
その中に安住するのは誠に哀れだ。

愛の傷を歎ぶ人々は  
愛を自由に動き回らせよ  
そうでなければ、恋の歓びは心地よいが  
その中に安住してはならぬ、哀れゆえに。

### ソネット

[ P 76 ]

おお、許して、キューピッド、わたしは罪を自白します。  
だから正當に慈悲を恵んでください。  
あなたの力に反する背信などわたしの心に  
宿ったことはない、ましてや想いの中になど。

わたしの愚かさは高く付いた  
わたしの魂には僅かな休息も平安も見つからぬ。  
軽率がわたしの想いを過誤に結び付け  
あなたの憤怒とわたしの危難を生み付けました。

初めに軽率な歌を作り出したあの想いと手を呪います  
そのためあなたに非難されて當然のこと。  
だがいまその手は正しく導かれ

あなたへの限りない称賛に王冠を授けます。

それはあなたの栄光と偉大さを高く掲げるでしょう  
これらのちっぽけなものがあなたの榮譽に水を差すよりは。

愛神に捧げるソネットの連環<sup>クラウン</sup>

1

[P77]

この奇妙な迷宮の中でどちらを向けばいいの。  
道は至る所にあつて、わたしは道を見失っている。  
右手に向けば、そこでわたしは愛に燃えている。  
思い切って前に進めば、危険が潜む。

左を向けば、疑惑が至福の邪魔をする。  
逃げ腰になると、恥辱が戻れと喚く。弱気になるな  
こんがらかった迷路はわたしの境遇に接吻するが。  
きっと嘆くことになるけれど、立ったままはさらに難しい。

こうして右の道、左の道を取り  
前に進み、立ちすくみ、後戻りをしながら  
情け容赦のないこれらの疑念に耐えて  
最高の賃金を支払って労苦を見つけねばならない。

だがわたしの混乱した感覚で精々思いつくことは  
全ての道を見限って、愛神の糸を辿ること。

2

[P78]

全ての道を見限って、愛神の糸を辿ること。  
その真っすぐな糸は魂の満足につながり  
えり抜かれた悦楽は喜悅の翼で飛翔し  
空しい愛欲には余地を貸し与えなかった。

貞節な想いに導かれ、われらの精神は諸悪を  
遠ざけるあの善を掴もうと決意する。

真の愛の光はだれも悔やませず、一途な恋人たちが  
求め、味わってみたいと願う果実をもたらす。

愛は祝福の光を投げる輝く星  
熱情の燃えたぎる炎、平和の根  
正義の油を注がれる永遠の灯火  
誠の画像、歓びを殖やすための子宮。

愛は真の美德、愛の目的は喜悅。  
愛の炎は悦樂、愛の縛り紐は真の恋人たちの力。

3

[P 79]

愛の炎は悦樂、愛の縛り紐は真の恋人たちの力  
一点の染みもなく、清純、純白。  
曇りが愛の光を蔭らすとは見えず  
傷となる汚れはなく、羞じらいが花を添えよう。

情愛は愛神の正当な力が試金石、錬金の火の  
金のように精錬される。漆黒は純白で  
過誤は真実で、暗闇は光で識別され  
誠実な愛神が報いるべきものと高く評価される。

愛神を飲ばせ、奉仕し、その力を誇りとせよ  
さすれば彼は堅忍不拔、純白無垢  
空気のごとく清澄、日光のごとく温暖、昼のごとく光輝  
真実のごとく公明、定めのごとく不変、報いることを飲む。

ならば愛神に従い、彼の力に忠実を励み  
彼の華やかな宮廷で栄誉の光となるのだ。

4

[P 80]

彼の華やかな宮廷で栄誉の光となるのだ。  
誠実と節操の眼の中で輝き

絶えず明るく燃える愛の炎を維持し  
ちょろちょろきらめくのでなく明々と燃え立つのだ。

ゆめゆめ気を緩めてはならない、地球から星が見えなくなるまで  
太陽と月がわれらを暗い夜に譲り渡すまで  
第二の〈混沌〉がわれらと世界を  
不和葛藤の怨念から解放するまでは。

そのときまで、愛神の従者である情愛よ、  
われらの心を支配し、立証せよ、この楽しき刺を  
細心の注意を払いて味わい求めさせる彼の力の利得を。  
その刺は幸いな傷、僅かな痛みしか伴わぬ。

快い刺はそなたの柔らかな心を貫いて  
燃えるが、燃えながらそなたはその傷を愛するのだ。

5

[P81]

燃えるが、燃えながらそなたはその傷を愛するのだ  
その時、真の憧れの重荷を感じ  
とても心地よいので、重荷の一部がその炎から  
逃げないようにと望むであろうほど。

誠実で偽りなき熱を恋い焦がれよ  
それは罪を浄化し、あらゆる不安に膏藥を  
授ける、魂を聖なる愛で鼓舞する力のある膏藥を。  
それは愛神の貞節な技の印。

愛神は歎びへの案内人。幸福への開いた眼を  
持ち、われらに最も良く教えられる  
いかに相応しくあるべきかを。これが彼には分かるのだ  
<sup>めし</sup>盲いながら、われらの最奥の想いを認める彼には。

こうしてわれらは幸いな愛に生きて利益を得る。  
愛神はわれらが慧眼の士にして教師なのかも知れない。

愛神はわれらが慧眼の士にして教師なのかも知れない。  
彼一人の中にこの力、二つの心を結び付け  
一つの梓組みの中で動かす力、二つの肉体を結び付け  
精神を支配する一つの魂とする力をわれらは見いだす。

眼は配慮を一つの大切な対象に結ばねばならない  
耳はたがいの言葉に関心を傾ける、何よりもそれが  
甘やかで学識があるかのごとく。恋人たちの  
この優しい満足が真実の愛の証拠。

満足は知性を富ませ、あなたの中にあるのに以前は  
気が付かなかったものを見えるようにし  
そのような才覚があなたの知識から隠れていたのに  
貯えられていたことに賛嘆の眼差しを向けさせる。

幾百万のこれらの品々が愛神の玉座を飾る。  
愛神の寵愛に恵まれる人々は何と幸せなことか。

愛神の寵愛に恵まれる人々は何と幸せなことか。  
誕生の切っ掛けが正しき欲望である生命は  
甘き炎を育み、キューピッドの火を燃え立たす  
これらの愛される眼の中を動くように心を誘う。

炎は彼の憧れを愛に作られた  
願望の熱に凝らされた純粋な想いで養う。  
火は元来滅ぼすものだが、この火は憧れ  
殖やし、育む、天のあらゆる喜ばしいものを。

愛はあなたを絵かきにする、たった一人の  
大切な人を、生き生きと、完璧に  
永遠のものとして、瓜二つに描けるような。  
その技は最高の職人に勝り、あなたに身近な者となる。

これらは最小の褒め言葉。ならば是非とも認めねばならぬ  
愛を退ける者、自らを愛したためしなし、と。

8

[P84]

愛を退ける者は自らを愛したためしがなく  
心から愛の価値を称賛しない者は  
呪われてあれ。愛の中では限りない祝福が  
支配し号令を下す、美德からなる天の火に

養われ、真実と合体し、憧れに煽られ  
価値に力を与えられ、気遣いに更新され  
決して心変わりを知らない想いの中で燃えながら。  
嫉妬の茨はここでは歓迎を受けず

冷淡に愛を追跡して通り過ぎる  
氷の海で長いこと凍ったままの人のように。  
だが貞節にあなたの情熱を起動させ、想いに  
心を徳高い愛から外れるよう誘惑させてはならない。

あなたの恋心を他の目的に当ててはならない  
恋心が名誉の愛顧を得て戻って来れる所でなければ。

9

[P85]

恋心が名誉の愛顧を得て戻って来れる所でなければ。  
そこにはヴィナスの愚行を宿す場所はなく  
追い払われる、愛の女神の美顔と品位に  
相応しくないとして。彼女は淫らであったのだ。

われらの心は女神の息子に従う、そこには罪が  
住んだためしはなく、一時さえ休まない。  
たとえ彼に過誤があっても、女神の中で常に始まり  
当てにならぬ作法は女神の胸から吸い取ったもの。

情欲が愛と見なされるなら、邪悪が間違っ  
て付けた名だ、その悪徳に彩色して隠すため。  
そうでなければ人々は自らの言葉でそれを  
認めることを恥じ入り、愛の代わりに

この子を産む、怪物のごとく生まれ出て愛と理性の  
宮廷から切り離されるはずのこの子、情欲を。

10

[ P 86 ]

愛と理性の宮廷から切り離されるはずだ  
なぜなら愛神は今や理性に全幅の信頼を置き  
美点と好意と一緒に生まれるから  
正当な両親、愛神と理性の子供たちとして。

理性は顧問官、愛神は王国の  
支配者、長く王冠を被りぬ。  
侮蔑・否認の恐れが全く存在しない王国では  
愛神も理性も猜疑の眼を誘発されない。

ならば一つから作られた彼ら二人の力を崇めよ  
淫らさとあらゆる瑕疵を斥けよ  
それらは悪の手先、ペテン師、悪い意図で  
始められた愚行を支える者たちだ。

冷たく湿った不毛の大地から生まれた果実は  
眼には心地よいが、無益で腐っている。

11

[ P 87 ]

眼には心地よいが、無益で腐っている  
そのとき天は、弱く冴えない大地に  
諸悪が跋扈する豊饒を生み出す自由を授けた。  
諸悪は熟して必然的な飢饉をもたらす。

時ならず時宜を得ず、悪い時に植え付けられ  
時期あしく生まれ出でし穀物。  
それは毒人参のように屈折した機知の歓楽を涵養し  
そこでは手に負えない毒蒸気が果てしなく泳ぎ回る。

われらが避けるべきものを喜んでではならぬ  
歓びの影が現れるが、正嫡の炎は完全に消され  
貧しい灰に占領されて、今しばらくは  
冷めて色褪せた憧れを預かる。

いや違う、愛神に栄光を授けよ、さすれば  
彼には権力が与えられ、王の権利を勝ち誇る。

12

[P88]

彼には権力が与えられ、王の権利を勝ち誇る。  
それは萎れることなく、美しい花の盛りのように  
善きことのために落ち、艶やかな色を失うが  
消滅するのではなく、実を付けて損失を修復する。

愛は堪らない愛しさであなたを青ざめさせるかも知れぬが  
爽やかな楽しみが愛の光を回復する  
何にも比べようがないほど清らかに美しい光を。  
その美しさには念入りに着飾った夜のヴィナスさえ及ばない。

このように誉れ高く自らを委ねる者には  
数々の幸福が付き添う、次々に  
歓びを補充され、満足の宝物  
馥郁<sup>ふくいく</sup>たる喜悅で、心は豊かに高められて。

こうして愛神は地上での聖なる者と見える  
霧から解放され、晴れやかに清らかに照り映えて。



霧から解放され、晴れやかに清らかに照り映えて  
善には賢明、悪には無垢  
清浄な友情が得難いと評価され  
愛の忠誠、意志の正義が同居する所。

愛神においてこれらの称号は、幸せな生活を  
整える者、正義の絶対的擁護者  
姑息な技と欺瞞の処罰者としての役目を  
果たす。そこから方向性が見えてくる。

ならばあなたに、あらゆる心の最高司令官  
優しく正しい情愛の支配者  
愛の大王に、無理遣いの苦しみ、心変わりの想いから  
解放されたわが魂を、あなたを信頼して捧げます

この王冠、わたしその人、他に持っているもの全てを添えて。  
あなたが前にあの方にあげてしまった、わたしの心は別にして。

あなたが前にあの方にあげてしまった、わたしの心は別にして。  
あなたはそれを征服した印に見捨ててしまった  
貴重な宝物蔵にしまって置くには価値のないものとして。  
だがさらに汚れない心はあなたの許には留まらない。

わたしの心が心から捧げる貢ぎ物は  
手垢の付いていない愛の誠、純粹な想いがわたしのために  
罪の負債を支払う。そこでは〈節操〉が権力をふるい  
君主として支配する、妬みの深い恨みに傷つくことなく。

だが愛の宮廷で必ずやあなたの敵として  
付きまとう他の禍は、わたしの仇であるはず。  
呪われた嫉妬が全勢力を傾けて  
わたしの破滅を<sup>はか</sup>諮る。こうしてわたしの危難が見える。

愛に熱烈に燃えているわたしではあるが  
この奇妙な迷宮の中でどちらを向けばいいの。

クラウン  
《連環終了》

ソング 1

[ P 91 ]

優しい御方、あなたの視線を楽しませて  
朝の太陽より清澄で、眩い視線を。  
それは春には歓びを与え  
夏の壮麗もそれには及ばない。  
目の前にある視線は法悦をかき立て  
悲しくもなくなると哀惜される。  
だが愛の王国で再びまみえると  
われらの至福は倍增する。

しかし不在には不在の楽しみ方があり  
誠実な愛し方の試金石となる。  
離れていても、愛の力は生きる  
眼の中と同じく心の中に。  
そのような慰みは完全に追放し  
あなたの愛しい視線、わたしの目の前にあれば  
喜悅と結び付いて微笑んでくれる視線の中に  
いつも寵愛を見出す方がいっそう心地よい。

喜びの眼、愛の唇  
情熱からはぐれない心は  
優しい情愛の中をこそ動く  
誠実の炎の中で生きかつ燃えるために。  
最愛の人、ならばこの優しさをください  
わたしに命を叶えて、それはあなたの視線  
その中に包まれてわたしは祝福されて生きるのです  
太陽の綺麗な光を恵まれるよりは。

ソング 2

[P 92]

かわいいシルヴィア、森の木陰で  
綺麗なニンフたちと横になり  
近くに眼にした、キューピッドがいる所。  
愛の王冠を戴く君主  
素っ裸で、翼を羽ばたき  
銀梅花の木の中で遊び戯れる。  
その姿に突然の笑い声  
神のあられもなさを見たゆえの。

愚かにもからかい始め  
冷やかし楽しみ  
彼が不安を生むのを知らず  
彼の意志が彼の権利であると知らずして。  
彼女らの嘲弄に気づくと  
捨て鉢の激怒に膨らみ  
自らの名誉が是認されなければ  
憤怒の抑え方を知らなかった。

必殺の矢は放たれると  
すぐに的を射貫いた  
心への最短の道を知っていて  
哀れなニンフを刺し貫いた。  
一人が射貫かれると、他の者たちは跪いた  
嘲ったり強大なキューピッドの名を  
斟酌しない、責めを負うべき  
それらのニンフのみならず。

だから気をつけよ、無為に嗤うな  
愛神の号令を無下にしてはならぬ  
なぜなら彼はすぐにそなたの強さを欺くであろう  
たとえその眼は欠けていても。

ソング 3

[P93]

来れ、楽しい春よ、われらの悦び  
冬は長く意地悪をした。  
悦樂をいつまでも支えて  
お前の美しさは決して終わらない。  
春よ、そうして永久に  
成長せよ  
常に増える喜びとともに。

寒さはここから追放されよ  
希望がわたしから消え去るまで。  
春の綺麗さを祝福せよ、自由に  
流れて豊かに育つものを。  
甘鳥は歌う  
春がすべての  
歓樂を授けるがゆえ。

フィロメル あずまや  
夜啼鶯は四阿に  
愛しい隠れ家を作るが  
惨めさを嘆く。  
穏やかに歌声を振り絞り  
甘い歌声ながら  
ぴったり一致する  
彼女の不遇な苦しみに。

ソング 4

[P94]

恋人たちよ、真実のみ語るを学べ  
誓ってはならぬ、誓いは捨てよ  
年はとっても常に若く  
やるつもりのあること以上は言明するな。

破ることは冒瀆と考えよ  
愛して約束することを。  
涙ながらに語ることを

ゆめ忘れるな、恋の終焉を迎えるとき。

栄誉と考えてはならぬ

誘惑し欺くことを。

名誉はかかる、価値によって

得たものを捨てないことに。

名を上げるには役立たぬ、われら

弱き女たちが拒絶しないものを試しても。

寛大さにわれらの落ち度あり

あなた達が間違いを仕出かそうとするとき。

ええい、やめなさい、女心を弄ぶのは。

得た時に保つのは大きな利得

苦しみで贖ったものを

すぐに蔑んで避けるより。

価値なきと評するなら

なぜ当初はそれを突き動かすのか。

価値ありとすれば、なぜ軽蔑するのか。

誓っておいて嘘をつき、愛することはできない。

愛を装うことなど出来はしない

心が動くのはただ流行を追うがため。

誰も選んでおいて嫌いになれない

欺瞞の心だと立証されない限り。

だが、あなた方が選んだ楽しみ事は

どれだけ多くの女を欺くかということ

あたかも名誉への責務が法王の勅書のごとく

発動し、どんな女も例外とするは安全ならずとばかりに。

この愚かさを逃れ、愛の真実に

立ち戻れ、そして試すのだ

幸せに燃えるのは殉教者のみ

嘘をつく者は恥辱の最期を迎えることを。

ソネット 1

[P95]

心が失われたわたしに何が期待できよう  
物憂い昼間の後の、清らかな夕べか。  
ああ、浅はかな空想よ、それは悲嘆の心を  
癒したり、軽視を慰める手段にはならない。

助け船を出すべき人々はわたしと援助を拒絶し  
淫らな欲望と気まぐれな戯れを弄ぶ  
ふざけた卑しい快樂が権力を振るい  
無礼が敬意を知らず横行するとき。

おお、キューピッド、お前の母親に恥を思い知らせよ。  
若々しい炎を見限っていい頃合いだ  
名誉を汚し、いい年をした過ちであり  
お前の名前から偉大さを剥奪する炎を。

お前は愛の神、彼女は情欲の神  
なのにお前の力を奪い、不正であろうと力む。

ソネット 2

[P96]

夕べの森の中でキューピッドを眼にした  
冷たく濡れて泣いていた。道を見失い  
眼が見えず、いっそうはぐれてしまいそう。  
それを見たわたしには憐憫の情が生まれた。

わたしは彼を優しく抱き締め暖めた。哀れな子供の  
彼は足止めを食らい飢えて死にそうと嘆き  
常連の餌食がいなくて苛立った、その荒れ果てた  
場所では、誰も彼を持て成してくれないから。

わたしは彼を見つけたことが嬉しくて

奉仕をすればきっと自由が手に入ると考えて  
両腕でそのときは傷つける恐れのない彼を抱えて

銀梅花の木蔭へ無事に運んだ。

ところが道々彼の力を思い知ることになり  
心は爛々と燃える、これが懇ろに暖めたわたしへの報酬か。

ソネット 3

[P97]

ユーノは常に夫のジョーブに眼を光らせ  
天上から降り来たり地上で吟味する  
夫を天の宮居からしばしば抜け出させる  
意中の恋人が見つからぬものかと。

わたしが木蔭に横になっていた所のすぐ近く  
彼女は追いかけてやって来たが、わたしが動くのを見て  
「見かけなかったかい、徳が決して根付いた  
ことのない人がこの道を急いで行くのを。

「その人ときたら、愛は大きな憎しみをかき立てるために生まれ  
おのれの楽しみのため淫らなニンフに言い寄るんだよ。  
その名はジュピター、定めによりてわが夫  
女のために私を、天を、彼の玉座と光をなおざりにする人さ。」

「お見かけしておりません」とわたし、「ただここには大勢が  
おります、心の中で愛が同じような戦いをしたことのある人々が」。

ソネット 4

[P98]

愛しい御方の影像を見たとき  
貪るような視線をわが眼はそちらへ傾けたものだ。  
〈恐れ〉と〈欲望〉が心のうちで言い争う  
〈恐れ〉は気づかれはしまいか、〈欲望〉はさらに近づきたいと。

わたしの魂の中にひとつの〈霊〉が現れて

大胆さを請け合い、わたしの侍者だと  
触れ込んだが、わたしは信用してわが眼を貸さなかった  
他の女たちがあの方の心を牛耳っていると思われる所では。

わたしはどこからこの危険が生まれるのかを捜査した  
〈嫉妬〉がその毒の卵を孵化させるとき  
わたしの飢えた眼はあの方への視線に恵まれてはならぬ  
そんな無価値さがわたしの中に宿っていたのなら。

それでもわたしの心には、嫉妬の眼に見られずに  
真の影像が高らかに存在するであろう。

ソネット 5

[P 99]

最高に美しい陽の顔を、しばらくの間でも  
隠してしまう巨大な煙の雲に似て  
悪がわたしを陰らせる、真実が微笑み  
正義が太陽のごとくそれらの靄を縛って閉じ込めるまで。

おお、毫碌した〈時の老人〉よ、恥ずかしくないのか  
時をむぎむぎ滑らせて、災いがお前の熟練と価値を  
欺き、虚偽がお前の往古の善を汚すがままに  
しておくとは、今では不幸しかそこに住まぬが。

一度でも眼を上げて、お前の骨の折れる走りをやめよ  
そしてわたしの悲惨さに霞んだ眼を凝らすのだ。  
そんなに慌てないで、わたしの憂慮に止めを刺してくれ。

お前の砂時計をわたしの災いに向けて引っ繰り返してはならぬ  
砂時計にどれだけの砂を満たしても  
砂の一粒一粒にわたしの悲しみは必ず届くのだから。

ソネット 6

[P 100]

ああ、もう二度と朝など来なければいいのに。



この悲しい場所を治める曇った夜と  
これらの幸なき部屋に光彩を与える天からの光があれば  
わたしの愛を大切に抱くその光は影で蔽われているから。

妬みの濃い霧をここでは主人とせよ  
太陽から生まれた昼は、光を潔しとせず、悪意ゆえ  
顔を出すな、光の中でキューピッドと恋人という種族は  
軽蔑され、恥辱が綺麗に照り渡る。

わたしを暗いままにしておいて、主要な光を奪われ  
人を傷つける嫉妬が力づくで支配し  
紙芝居のような偽りの喜びしか与えないゆえに。

思うに、昔の作り話はあらゆる流儀や  
絵模様に星星を与らせているが  
わたしの想いの中では愛の真の形が生きるであろう。

### ソネット 7

[P101]

時間も空間も思案も詩を書く技術も  
わたしの愛を知る心に休息や平穏を与えられない。  
記憶も想像力も常に甦る  
わたしの疼きの量を計れない。

それでもわたしは望まない、愛しい愛神よ、立ち去れとは。  
わたしの情熱よ、始まったときのように  
支配し傷つけ楽しみを与えてほしい、人には慰安と  
見える胸騒ぎを授けることがお前の極上の巧みゆえ。

一人でいるとき、お前の骨折りを考える  
お前は何と苦勞して我らの最良の部分を得ようとするのか。  
その時、引切りなしにお前の教訓をわたしは学び

お前の栄光に思いを巡らす、それは常に上昇する  
世界が終わるところまで。

その時われらはお前の久遠の力を認識するのだ。

ソネット 8

[P102]

何と太陽がツチボタルのような顔をしている。  
黄金<sup>かんばせ</sup>の顔からは冷たい光線が降りて来て  
昼間の力が終わりに近づいているのが  
さよならをする時が間近なのが明らかだ。

今日、彼の顔は青白く見えた、澄んではいたが。  
その理由は、北の国に光を貸し与え  
暖かさを差し向けねばならないから  
その凍った部分は愛の熱を大切と思えなかったのだ。

ああ、明るい太陽よ、お前がここから離れることを  
そんなに悲しむのなら、不幸なわたしは何を嘆こう  
お前が行く場所から恵みを待ち受けるわたしは。

お前はわたしが死ぬほど焦がれるその視線を享受する。  
わたしは心の中でお前の幸運を羨望する。だが嘆くがよい  
いつ失うとも知れぬゆえ。お前を慈<sup>いつく</sup>しもう、この状態は改善に向かうから。

ソネット 9

[P103]

わが詩神よ、今は幸せな安らぎに身を委ね  
愛の誠の静穏さの中で眠りなさい。  
書くのはやめて、空想は他の人の心に移し  
新たな不安に目覚めてはなりません。

励みたいなら、それらの想いを真実へ  
向けなさい、真実は永久の善を検認し  
最高最善の真の歓びを味わい、決して  
消えることのない限りない利得を手に入れます。

ヴィナスとその息子の物語は若い初心者に

任せて、彼らの頭脳を偉大な愛のお話で  
活気づかせ、その炎から彼らが体験した  
運命を詩に書くための熱を得させなさい。

そのように離れて。過去の出来事は〈あなた〉の愛を示します。  
さあ、〈あなた〉の節操に〈あなた〉の淑徳を立証させるのです。

## 〈注 解〉

### ソネット 1 [P 1]

☆詩形は基本的に弱強五歩脚で、脚韻はa b a b b a b a c c d e e dと踏む。

☆この最初のソネットでは、大抵の連作ソネット集の始まりとは違って、愛する人との出会いの模様とか愛する人の外面描写とかは取り扱わず、一気に語り手である恋する女性の内面的心理描写に専念している。

1～4行→ヴィナスとキューピッドの夢の中の幻想については、ペトラルカ『恋の勝利』の冒頭場面を参照。そこで、語り手は愛の征服の幻想を体験する。『恋の勝利』の人気度については、フランスス・イエイツ『アストレア』(1975年)112-20頁を参照。また、メアリ・ロウスは劇作『愛神の勝利』一幕一場で同じ趣向を用いている。

5行→ヴィナスは伝統的に鳩が曳く馬車に乗っている姿が描かれる。オウィディウス『転身物語』14章、597行。また、シドニー『アストロフィルとステラ』79番1～4行、「甘い口づけよ、そなたの甘さを僕は甘美に綴りたい／そなたは、最も甘い甘さをも、なお甘くしてくれるもの／それぞれの感覚が各音部を受け持つ最も快い和音／ヴィナスの戦車に鳩を繋ぎ、それを正しく導くもの」(大塚定徳他訳)やシェイクスピア『ハムレット』1幕5場29～30行「瞑想や恋の想いのように迅速な翼」とあるのを参照。

8～9行→ロウスは『ユレイニア』の題扉頁に図解された象徴的な挿話で、燃える心臓を掲げるヴィナスを描いている。因に、ダンテは『新生』3章で、愛神がダンテ自身の燃える心臓を恋人ベアトリーチェに与えようとする様を描いている。

12行→心臓の抹殺は、伝統的にソネット作者が用いる綺想であるが、ドレイトン『イデア』2番や『アストロフィル』20番などで利用されている。

### ソネット 2 [P 2]

2行→「宮廷」は伝統的な〈愛の宮廷〉の比喩であるが、これは間接的にグロリアナ＝エリザベス女王(あるいはジェームズ王)の宮廷に言及している。そこでロウスは従兄のウィリアム・ハーバートと密接な関係を持ったはずである。彼女は宮廷に近いウィリアムのロンドン屋敷“Baynard's Castle”を結婚前後に度々訪れている。本作品の自伝的性格がこのソネット2番にすでに現れている。また〈愛の宮廷〉のイメージは本連作集中度々

繰り返して現れる。P 3、12、76、77-90、92、95、98、101を参照。

9行→眼を星に譬える形象はペトラルカに端を発し、シドニーや作者の父でシドニーの実弟ロバートの詩にも使われている。例えば、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』2幕2場15～17行「大空に輝く一番美しい二つの星が／何か用事ができて彼女の眼に頼むのだ／戻ってくるまで代わりにきらめいてほしいと」。

#### ソネット 3 [P 3]

3行→愛神が愛する人の眼で輝くという考え方は、『アストロフィル』12番1行「愛神よ、そなたはステラの眼の中で輝くので」で用いられていて、この詩全体に影響を与えている。

13行→キューピッドの至上権は、この連作集の後半で再び持ち出され確立される(P 76、77-90、92)。

#### ソネット 4 [P 4]

12行→「大雪」は特定の冬を示唆するが、Thomas Dekker が *The Great Frost* と *The Cold Year* で描いた大雪(1607年、1614年)が名高い。

#### ソネット 5 [P 5]

6行→当時の人々は、眼は自ら光線(の束)を放つと考えた。同じイメージが例えば、ダン「恍惚」7～8行「僕らの視線は絡み合い、僕らの眼を二重に燃られた一本の糸で繋ぐ」に見られる。

12行→このように名詞や動詞を積み重ねて行く累積的修辞の型は16世紀後半の詩にはよく見られる。例えば、『アストロフィル』100番やトマス・キッド『スペインの悲劇』3幕2場1～24行を参照。

14行→この詩はいわゆる「相補詩」“correlative verse”, “carmen correlativum”, “vers rapportés”の形式を利用している。この形式は16世紀後半の詩人達に人気があり、その例が、『アストロフィル』43番やロバート「ソネット31番」、「牧歌9番」に見られる。

#### ソネット 6 [P 6]

10行→“will”はロウスの従兄で恋人“William Herbert”[後の第三代ペンブルック伯爵で、シェイクスピアのパトロンとして最初の全集第一フォリオ版を献呈された]のことを暗示する。ロウスは度々この懸詞を多用している。また、この懸詞はハーバート作の詩で反復され、“Wroth”を“Worth”として用いている。

#### ソング 1 [P 7]

1～17行→ロバート「ソング3番」の反映があるが、ロウスは歌人の性を逆転させ恋する者を女羊飼に設定している。牧歌的状况をテーマとして歌う詩はシドニー的手法であり、またロウスも劇作『愛神の勝利』で繰り返して用いている。

23行→「柳」は拒絶された愛、失恋のシンボル。シェイクスピア『オセロー』2幕3場

39行を参照。

33行→恋する者が木々に詩を刻むという趣向は牧歌的慣習であり、シドニー『アーケイディア』やロウス『ユレイニア』第1部第1編にも見られる。

45行→「誠実な」は最終行の「心変わり」と対になり、〈ロウス＝パンフィリア（心から愛する）〉と〈ハーバート＝アムフィラントス（二人を恋する者）〉との対比が明らかである。ロウスが執拗に〈ハーバート＝アムフィラントス〉を気まぐれな者として描いているのに対して、ハーバートは自詩でこれに直接反駁を企てている。「貴女は私の心<sup>あなた</sup>変わりを怪しみ、御自分の一途さを高く評価なさるのか。」

#### ソネット7 [P 8]

1～4行→ロバート「ソネット18番」の反映がある。

13行→「愛神様」というキューピッドへの茶化した言及の仕方は、『アストロフィル』53番の影響が見られる。

14行→愛神に眼がないという考えは諺的慣例で、何度も言及される。例えば、シェイクスピア『夏の夜の夢』1幕1場234～37行。

#### ソネット8 [P 9]

9～12行→夜と昼とを対立させるのはペトラルカ以来の詩的慣習で、『アストロフィル』96番にも見られる。

#### ソネット9 [P10]

9～12行→ロバート「歌3番」の反映が見られる。

13～14行→『アストロフィル』100番「あらゆる歓楽よ、さらばだ、私は悲しみの中に生きよう」やロバート「ソネット7番」「快楽と離婚し／これからは憂慮と祝言をあげるぞ」に類似の表現が見られる。

#### ソネット10 [P11]

1行→「草臥れた旅人」は当時の英詩には頻繁に現れるが、ロバート「ソネット17番」に類似の言葉がある。また、シェイクスピア『お気に召すまま』のロザリンドの台詞「旅行く人か! なるほど、あなたが悲しくなるのもむりはない、どうやらあなたは自分の土地を売り払って他人の土地を眺めに出たようですね、そうしていろいろ見て回るだけでなにももたないということは、目はゆたかになるが手は貧しくなるということです」4幕1場21～25行（小田島訳）を参照。

#### ソネット12 [P13]

5行→恋する者が昼と夜とに向かって交互に懇願するという構図は、ペトラルカ的慣習であるが、例えば、『アストロフィル』89番、スペンサー『恋愛小曲集』86番、ロバート「ソネット19番」に見られる。

6行→「休息」から一連の擬人化が始まるが、勿論、その先頭には「夜」が立つ。

ソング2 [P14]

5行→この表現はペトラルカ的常套手段であるが、9～10行でロウスは意識的にこれからかっている。

15～17行→鄙びた牧歌的隠遁生活を称揚し、雅な宮廷生活を蔑む態度は当時よく見られる詩的表現である。例えばスペンサー「コリン・クラウト故郷に戻る」766～774行を参照。

ソネット13 [P15]

2行→ロバート「ソネット26番」13～14行「おお、救いたまえ、あなた自身のものを減ぼしてはならない／自らを害しながら知らないのは君主の技」を参照。

14行→カメレオンは空気を常食として生きてしていると想像された。『ハムレット』3幕2場93～94行「カメレオンの食べ物で、頗る元気。約束ばかりを詰め込まれ、空気を食べて生きています」を参照。

ソネット14 [P16]

14行→恋する者の自由の喪失というテーマは『抒情歌集』97番以来のペトラルカ的慣例である。『アストロフィル』2番、47番(本詩と同じく、両詩とも疑問形で始まり、結びの対句で突然の逆転を示す)を参照。

ソネット15 [P17]

☆この作品は『アストロフィル』96番、97番に依拠している。

ソネット16 [P18]

☆この作品は『アストロフィル』39番「夜に呼びかけるソネット」やロバート「ソネット6番」の影響が見られ、ペトラルカ的慣例に則って書かれている。

ソネット17 [P19]

14行→「熱」と「寒さ」の対立は、ペトラルカ以来の伝統的呼び掛けの手段である。

ソネット18 [P20]

1行→「昼」と「夜」の対立の構図はペトラルカ的常套手段で、『アストロフィル』89番、ロバート「ソネット19番」でも使われているが、二人の男性詩人は対立をそのまま温存するのに対して、ロウスは一方の選択を力説する。

ソング19 [P22]

☆この作品はロバート「歌31番」の影響を受けている。また、シェイクスピア『ソネット集』73番も参照。

『パンフィリアからアムフィラントスへ』

10行→落葉と裸の枝は木々の喪に服する行為と喪服を着ることを表す。例えば、ロバート「歌43番」1～2、4～5行「打ち捨てられし森よ、木々は激しい嵐に打ちひしがれ／かつて太陽を遮った瑞々しい葉群は今や大地に散らばる…かつて色とりどりに着飾り、自然の花盛りを誇示した庭よ」を参照。

ソネット20 [P23]

☆この詩に見られる「暗闇」と「不在」の連想は常套的である。『アストロフィル』89番、91番、ロバート「ソネット30番」、ハーバート「詩28番」などを参照。

ソネット21 [P24]

9～10行→愛する人を夢に見るのは恋愛詩の常套。『アストロフィル』38番を参照。

ソネット22 [P25]

1行→「望まれるものが同時に黒であることの不可能性」という、初期近代イングランドの植民地主義的言説をロウスが利用しているのは興味深い。類似の表現は『ユレイニア』第1部396頁のパンフィリアの言葉に見られる。これに対して、ハーバートは「女たちの顔ではなく、彼女らの愛する人の眼の中に美は宿るという逆説」という詩の中で「白と黒」の対比を利用しているが、そこでは「黒」を望ましいとして受け入れ、恋人を「エチオピア人」になぞらえている。

5行→ロウスは宮廷で上演されたベン・ジョンソン『黒の仮面劇』（1605年）に出演し、肌を黒に塗り上げたはずである。

10行→原文“worthless rite”には“worth / Wroth”, “rite / write”の地口がある。

13行→シェイクスピア『アントニーとクレオパトラ』1幕5場27～28行「フィーバス神に愛され抓られて肌が黒い私のことを／考えて」を参照。

ソネット23 [P26]

2行→「狩猟」にはメアリ・ロウスの夫、サー・ロバート・ロウスの狩猟や鷹狩好きへの当て擦りがある。メアリ・ロウスはこれら夫の娯楽を非難の眼で見ていた。

9行→「追跡」は、自らの想いと狩猟との懸詞。

ソネット24 [P27]

1行→老人からの若者への忠告は因習的だが、『オールド・アーケイディア』第1牧歌におけるゲロン、ヒストール、フィリシデスの歌を参照。

ソング4 [P28]

1行→ジョン・ダン「最愛の人、ぼくは行くんじゃない」に直接呼応している。

ソネット25 [P29]

4行→ロバート「ソネット20番」の残響がある。

7行→シドニー的引喩だが、ハーバート「詩41番」及び「P51」を参照。

12～3行→「星」は「愛される方」で、その光は神話上戦いの神、火星マルスの光に好意的に譬えられる。もう一つの「星」は「愛する女」を指す。しかしながら、ここには恋する男アストロフィル（シドニー）と恋される女ステラ（ペネロピ・リッチ）が登場する『アストロフィル』への特殊な引喩が見られ、更にその関係を逆転して、ロウスが描く女性詩人の男性の星への愛がロウス自らのハーバートへの愛を反映している。

ソネット26 [P30]

1行→二人の恋人たちが心を交換するイメージは宮廷恋愛の常套である。『アストロフィル』『ソング10番』、『オールド・アーケイディア』第3巻で羊飼ドロスに変装したムシドロス王子の歌う第1歌などを参照。

12～14行→肉体的愛と精神的愛を結び付けるプラトンのイメージ。

ソネット27 [P31]

1～2行→『アストロフィル』67番「希望よ、お前は本物なのか、それとも私に媚を売ろうというのか」に類似している。

ソネット28 [P32]

1行→「悲嘆」への呼び掛けは、『アストロフィル』94番のその残響である。同じように、悲嘆は罵られると同時に歓迎される。

ソネット29 [P33]

5行→「天体の変化」は星々の巡りとそれが支配する個々人の宿命を示唆する。またくアムフィラントス＝ハーバートの変わりやすい気質への皮肉な言及がある。ロウスは同じ非難を『愛神の勝利』3幕2場1～20行で書いている。

ソネット30 [P34]

11～14行→ロバート「ソング19番」の依拠して書いている。

ソング5 [P35]

19～24行→「時」が「名声」を征服するというペトラルカ的伝統的秩序感をロウスは逆転させている。

ソネット31 [P36]

5行→「運命の女神」は伝統的に目隠しをされて描かれる。



『パンフィリアからアムフィラントスへ』

ソネット32 [P37]

1行→ロバート「ソネット35番」の残響がある。

10行→蜜蜂の没自我的精勤ぶりは諺的だが、シドニー的寓意として多用される。

ソネット33 [P38]

9～10行→『アストロフィル』5番5～6行「紛れのない真実だ、キューピッドの矢と呼ばれるものが／偶像に過ぎず、我らが自ら刻むのは」の残響がある。

ソネット34 [P39]

5行→嫉妬の「眠らぬ眼」は、『アストロフィル』78番と同じ趣向。

ソネット35 [P40]

1～2行→流産の比喩が5～10行の政治的文脈と対比して用いられているのは興味深い。何れも信頼感の侵犯を示唆する。

8行→“will”は“William Herbert”の地口。度々行われるので、これ以降は特別な場合を除いて指摘しない。

13行→「絶頂“pride”」は「成功の頂点」と「性的恍惚の頂点」の両方の意。

ソネット36 [P41]

12行→恋を隠すのはペトラルカ的常套手段だが、ここにはロウスの自伝的省察がある。彼女は従兄ハーバートとの不倫の愛を隠さねばならなかったからである。

ソング6 [P42]

☆ロバート「ソング1番」とハーバート「ソネット」の残響が見られる。

ソネット37 [P43]

4行→中世以来の肉体の四体液理論への言及。血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の四つの体液の配合の具合で人間の体質や性質が決定されると信じられていた。

13行→「夜」「沈黙」「悲嘆」、これら三つの擬人化は『アストロフィル』96番に現れる。

ソネット38 [P44]

1行→ロウス自身が不倫関係が知られ、不義の子を身ごもったために宮廷から追放の憂き目を見ている。

7～8行→『アストロフィル』27番2行で、アストロフィルは「一番大勢の人々といるときに最大の孤独」を感じている。

ソネット39 [P45]

5行→想像力に富む修辞の腕前を誇示する詩を作り、過度な馬鹿げた詩的表現を生み出

す流行を追いかける宮廷詩人たちを、伯父シドニーと同様に、ロウスは嘲っている。

12～14行→ロバート「ソネット1番」の残響がある。

ソネット41 [P47]

☆この作品には、ロバート「ソネット1番」と『アストロフィル』68番の影響が明らかである。

ソネット44 [P51]

1行→この詩で描かれる川は、ロウスが生まれ育った父の屋敷ペンズハースト邸の敷地を流れ、度々氾濫したメッドウェイ川を想起させる。この川のイメージはシドニー、ロバート、ハーバート、メアリ・シドニーもそれぞれの詩の中で利用している。

ソネット45 [P52]

☆小言をいう友人に宛てて書かれた歌は、例えば『アストロフィル』14番やジョン・ダン「列聖」に見られる。

10行→ロウスは自らが悪魔に憑かれて気が触れたと描くが、悪魔憑きの女性はジェームズ一世時代には普通に見られたイメージである。ただ、ロウスはこの考えをからかい、自分が悪魔憑きに見えるのは、煩い友人を脅かす偽装としている。

ソネット48 [P55]

12～14行→ロバート「ソネット9番」の残響がある。

\*「パンフィリア」の署名は、最初の「ソングとソネット連作」が終結したことを表す。

\*次の7篇の詩は1のソネットと6のソングから成るが、形式的な番号は付していない。

このグループ(P56-P62)はこの連作集の第二部を形成し、ロウスはこれまでの55篇の詩でこだわり続けて来た伝統的ペトラルカ的形態(6ソネットに1ソング)を逆転させる。

ソネット [P56]

6行→“her”はこの詩の最終の2行から明らかなように、ソネットの「語り手」を指示して当然だが、恋敵の女が存在することを暗示し、この連作集の中心部に置かれて全体に漲る喪失感と一致する。

ソング [P57]

17行→「魔術」は『アストロフィル』ソング5番の影響を暗示する。

ソング [P58]

13行→キューピッドがその恋の矢で自分の母親のヴィナスを傷つけたという話は、オウィディウス『転身物語』第4章に見られ、ルネサンス時代の詩ではありふれた言及であ

る。『アストロフィル』17番、メアリ・ロウス『愛神の勝利』1幕1場などを参照。

20行→『アストロフィル』20番を参照。

ソング [P59]

8行→「支配者／従僕」という政治的隠喩の使用は当時の恋愛詩には常套手段だが、ここでは愛される方が新しい恋人を見つけたということが示唆されている。

ソング [P60]

2行→「忠実な羊飼」はシドニーの作品に普通に見られる人物だが、ここでは父ロバートの作品「牧歌9番」と彼女の『愛神の勝利』に登場する「森番」に拘わりがある。ロバートは自らをそのような人物として描いている。

ソング [P61]

12～13行→ハーバート（アムフィラントス＝二人を愛する者）とメアリ・ロウス（パンフィリア＝愛一筋）への引喩。

ソング [P62]

6行→この連作集の中心部の結末をなすこの詩の中心行に置かれた「嫉妬」は、愛される御方が新しい恋人を見つけたことに惹起される感情で、既にP56、P59、P61でも描かれたが、これから度々言及の的となる。この箇所では、愛される御方に、他の女性達が彼の魅力によって誘発され、狭量な感情によって急き立てられて、彼への本物の愛を感じる事なく彼の愛を求めるさまをしっかりと観察し、やがて彼女達が彼の愛を諦めるまで待ち、語り手であるわたしとの信頼し合える本当の愛を体験するようにと、懇願している。

\*ここから10編から成るソネット第2集（P63－P72）が始まる。歌われるテーマは、女の恋敵の存在への疑惑から完全な嫉妬と喪失感への移行である。

ソネット1 [P63]（第2集）

9行→「運命の女神」は、絶えず回り続け、成功の絶頂にいる人々（車輪の頂点に位置する）が悲惨をなめること（車輪の最下点まで落ちる）を要求する運命の車輪と共に描かれた。『アストロフィル』66番も同じイメージを利用している。

ソネット2 [P64]

1行→心変わりのテーマは前のソネットから続いていて、愛神をペテン師として描くが、この描写は『アストロフィル』11番を反映している。

3行→前にも指摘したように、キューピッドは盲目もしくは目隠しをされて伝統的に描かれる。

ソネット 3 [P65]

6行→メルクリウス（マーキュリー）は百眼の怪物アルゴスを麦笛を吹きシュリンクスの物語をして眠りに誘う。彼女はパーン神の求愛を拒絶し彼の抱擁を間一髪の所で躲して流れの葦へと変身する。パーン神は彼女を慕い続け、その葦から葦笛を作るが、それをメルクリウスが用いたのだ。メルクリウスがアルゴスを殺すのは、妻ユーノの嫉妬から恋人イーオを守るため雌牛に変えるが、その雌牛を怪しむユーノの指令を受けて監視するアルゴスからイーオを救出せよというジュピターの命令ゆえである。この詩は、嫉妬と喪失のテーマは持続させたまま、成就され拒絶される愛を提示するため二人の語りを再構成している。『アストロフィル』11歌でも同じ神話が利用され、ステラはアルゴスの眠らぬ用心深い眼を恐れている。

ソネット 4 [P66]

11行→『アストロフィル』104番 7～8行「残酷な追放が私の凡ての感覚を閉じ込める／この暗い土牢」を参照。

ソネット 5 [P67]

9行→キューピッドを悪戯な反抗的な子供として描くのは常套である。

ソネット 6 [P68]

☆失意の恋人を海で難破した船に見立てるのはペトラルカ的隠喩（『抒情詩編』189番）。

5行→数多くの船が難破した、ケント州の沖合の危険な浅瀬の名前。初期近代イングランドでは諺的に利用された（例えば、シェイクスピア『ヴェニスの商人』3幕1場4～6行「グッドウィン砂州はとても危険な浅瀬で、致命的な所、多くの堂々たる船の残骸が埋まっている」）。

ソネット 8 [P70]

1～2行→愛の少年神、キューピッドの処罰はありふれた新プラトン主義的テーマ。精神的愛が達成される前に肉体的愛は規律の枷を嵌められねばならないから。この詩ではその処罰を貞節の女神、ディアナが受け持つ。連作集の文脈では、この処罰は理想的新プラトン主義的愛への昇華と共にソネットの連環の中でいみじくも行われている。同様の処置については、『アストロフィル』17番やグレヴィル『シーリカ』13番を参照。

8行→キューピッドへの侮蔑が彼の復讐を駆り立てる主要な動機である。

ソネット 9 [P71]

3行→ロバート「ソネット30番」の反響がある。

ソネット10 [P72]

1行→〈痴愚（神）〉を女性として描くのは因習的である。エラスムス『痴愚神礼讃』を

参照。

\*これからの4篇の詩は3つの番号のないソングと1つのソネットから成るが、ソネット第2集からソネット第3集への橋渡しをし、愛神への辛辣な非難から愛神と彼が表象する凡てのものへの賛歌への変化を跡付ける。

ソング [P73]

1行→季節の隠喩は当時の恋愛詩では普通に使われた。ジョン・ダン「愛の成長」を参照。

14行→愛と理性はシドニー的対立の構図を作る。『オールド・アーケイディア』第2牧歌集、『アストルフィル』4、5、9番など。

ソング [P76]

1行→ロウスは愛神への非難をこの詩で逆転させて、次のソネット連環で愛神を明確に称揚することの先駆けとしている。

《愛神に捧げるソネットの連<sup>クラウンまたはコロナ</sup>環》

\*ソネットの連環はイタリア伝来の伝統的形式で、ソネットの最終行と次のソネットの第1行とが全く同じか類似で結ばれる一連のソネット形式。連作最後のソネットの最終行は連作最初のソネットの第1行に戻るので、連作全体が一回りして「王冠」の形を作るのでこの名がある。ロウスは伯父シドニーのソネットの連環形式(『オールド・アーケイディア』第4牧歌中ストレフォンとクライオスが歌う歌で10行10連から成り、英語で書かれた最初の連環歌)、父ロバート「ソネット11～14番」の不完全なソネット連環、及び伯母メアリ・シドニーの文学サークルのメンバーであったサミュエル・ダニエルの『ディーリア』31～35番のソネット連環に依拠して書いている。ロウスの連環は複雑な14行ソネット連作で、初め精神的愛の卓越(キリスト教的新プラトン主義的貞節の変奏)を力説しながら、最後の詩ではこの主張を退け、上で述べた男性作家的連環詩とは異なり、自我よりむしろ愛の観念に関心を集中している。

ソネット1 [P77] (第3集)

1行→愛を迷路、迷宮に譬える比喩は当時の恋愛詩では常套。例えば、ペトラルカ『抒情詩編』202番「私は迷宮に入り込み、そこから脱出するすべはない」、ロバート「牧歌9番」など。愛の混乱、嫉妬、喪失感などのテーマが前の詩群で歌われた後だけに、これは適切な比喩である。

5行→右手は幸運と、左手は不運、不吉と結び付けられた。

14行→アリアドネの糸は怪物ミノタウルスを倒した恋人テセウスを迷宮から救出するのに役立つ。同じイメージを、ロバートは「牧歌9番」で、メアリ・ロウスは『ユレイニア』で用いている。

ソネット 2 [P78]

2行→この詩は世俗的愛から精神的愛への移行を記す。

9～12行→ここには一連の聖書的イメージが見られる。「星」はベツレヘムの星を暗示し、「熱情の火」は聖書の至る箇所に出てくるし、「平安」はキリストが地上にもたらし、「ランプ」はマタイ伝の賢明な処女たちの持ち物で、信仰のイメージはキリストその人、子宮はキリストを産む聖母マリアに属する。これらの言及が結び付いて、愛の宗教的解釈の先鞭を付け、男性詩人たちの世俗的愛の言説よりはメアリ・シドニーの『詩篇翻訳』を偲ばせる。

ソネット 3 [P79]

☆この単一音脚韻ソネットは『オールド・アーケイディア』で不実なギネキアが歌う歌を模倣している。ロウスはこれと誠実なパンフィリアを鋭角に対比して女の愛と忠誠について全く異なる見解を提出している。彼女はまた父ロバート「ソネット 3 番」に依拠しているが、父の考えとは違い、女の「わたし」は男の恋人の不実を詰るという趣向になっている。

1行→愛の神はキリスト教的意味合いと世俗的意味合いの両方を獲得している。清純さのイメージはキリストを暗示し、「宮廷」の観念はキューピッドが司る「愛の宮廷」を喚起する。

3行→『オールド・アーケイディア』で、王妃ギネキアは「恐れ of 雲」に自分の眼を閉ざしてくれるよう頼んでいる。

6行→愛の人を洗練させる力は、しばしば火が黄金を精錬する効果に譬えられる。

14行→連作集の前半部のアナクレオン体のキューピッド（小さい悪戯な子供の像）とは対照的に、気高い君主としてのキューピッドの概念を、今や語り手は検証している。

ソネット 4 [P80]

7行→新プラトン主義的考えでは、世界は究極的に破壊されて、先祖返りに原初の混沌に復帰することになる。

ソネット 6 [P82]

3～4行→二人の恋人たちの肉体が一つの心と魂に連結されるのは、ヘルマプロディトスを暗示する新プラトン主義的イメージである。

ソネット 7 [P83]

4行→ここでキューピッドは前の詩群に現れた悪戯な子供ではなく、成熟した精神的力を持つ者として描かれる。

ソネット 8 [P84]

11行→この詩は連環の焦点を巧みにずらしている。何故なら 1 番から 7 番で称賛された

『パンフィリアからアムフィラントスへ』

精神的愛は、彼女が今や以前歓迎された申し出を「貞節に」拒否できるという点で、恋する者の利益へと変更されているからだ。

ソネット9 [P85]

2行→愛の女神ヴィナスは伝統的宮廷愛の流儀で肉体的愛の表象として、精神的愛の神としてのキューピッドと対比されている。

5行→キューピッドのことだが、「太陽」との連想で新プラトン主義的理想主義的キューピッド観が投影されている。

ソネット10 [P86]

1行→愛と理性との対立の構図は典型的にシドニー的併置である。

ソネット11 [P87]

7行→恐るべき毒を生み出す植物名。ロバート「ソネット64番」に「だが、ああ、なぜにあなたは育てるのか／冷酷な絶望の毒の草を／愛の庭園に…」を参照。

8行→初期近代の医学的知識に拠れば、これらは体内で発生し健康もしくは精神に害をもたらす蒸気である。

ソネット14 [P90]

4行→ソネットの語り手と違って、「迷宮」を抜け出すことの出来る恋人のこと。

14行→ソネットの連環は最初の行に戻ることで完結する。この自己完結形式は、結局、語り手が愛と嫉妬の縛りから自らを解放出来ないという点で、語り手の自縄自縛感を反映する。ロウスはこの1行を散文ロマンス『ユレイニア』第1部で反復している。

\* 次の4つの歌から成る連作は凡て暗い皮肉な調子を伝える。

ソング1 [P91] (第2集)

☆ロバート「ソング20番」の反響である。

ソング2 [P92]

1行→伝統的牧歌に出る名前。

3行→連環での理想主義的キューピッドがまたもや悪戯な子供として描かれ、7～8行で揶揄される。

6行→ヴィナスに捧げられた木の名前で愛のシンボル。

17行→キューピッドは一般に弓と矢で武装して描かれる。

ソング3 [P93]

14行→フィロメルはテレウスに凌辱されて夜啼鶯に変貌する(オウィディウス『転身物

語』6巻)。それゆえ、この歌の出だしの軽い調子は結末の悲しみによって疑問符を付けられる。シドニー「サーテウン・ソネッツ」4番を参照。

#### ソング4 [P94]

32行→教皇の絶対権力に基づくカトリック支配への猛反発はシドニー一族の強固なプロテスタント主義信奉の伝統と軌を一にした考え方だが、愛される御方＝アムフィラントス＝ウィリアム・ハーバートを教皇と一蓮托生にするという構想はこの連作集全体の後ろから2番目の部分に敵意剥き出しの辛辣な結末を与える。

#### ソネット1 [P95] (第4集)

☆この詩は連作集全体の最後の部分の先導役を務め、愛を定義し表象するための詩の有効さをその主題としている。

9行→この詩では、ソネット連環の箇所(P77-P90)から継承したキューピッドの理想化が復活し、「情欲」の女神として指弾され、アドゥニスへの報いられない激情が10行目で言及されるヴィナスとは対照的に、彼は清純な愛と結び付けられる。この愛と情欲との対比は、前に何度か述べたように、新プラトン主義的発想であるが、ハーバート「情欲は彼の目的にあらず」で似たような対比が利用されている(33行目)。

#### ソネット2 [P96]

1行→キューピッドはアナクレオン体の詩に出るキューピッドのように子供として描かれるが、寒く貧しい乞食としてのキューピッドの戯画化は、ルネサンス詩では常套であった。例えば、『アストロフィル』17、65番、バーンズ『パーテノフィル』93番、コンスタブル『ディアナ』6、7番、ドレイトン『イデア』33、48番、グレヴィル『シーリカ』12番を参照。

#### ソネット3 [P97]

1行→ジョーブの妻ユーノへの背信行為は数限りなく、その多くがオウィディウス『転身物語』に活写されているが、ここでこの神話のエピソードを用いたのは、男性の不実と女性の嫉妬の主題を持ち出すためである。

#### ソネット4 [P98]

1行→恋人の映像の持つ力の描写はルネサンス恋愛詩では常套である。例えば、『アストロフィル』32番、スペンサー「恋愛小曲集」45番、ジョン・ダン「夢」を参照。

7行→「侍者」と訳した“Genius”は、守護霊、または愛の宮廷の司祭のこと。あるいは、その人の本性または特有の資質のこと。

14行→『アストロフィル』32番13～14行は、愛する人の「像」に言及する。



『パンフィリアからアムフィラントスへ』

ソネット 5 [P99]

3行→この箇所、ロウスは宮廷からの追放という自伝的要素（7行目の名前、地名から明らかだが）を使っている。

4行→太陽は正義の伝統的寓意である。

ソネット 6 [P100]

11行→ここでは虚構の愛と真の愛との対比が立てられている。

ソネット 7 [P101]

1行→詩を書くという技巧への自意識的言及だが、ロウスは詩には本当の彼女の愛は描けないと考えている。

7行→愛する御方（アムフィラントス＝ハーバート）は著者が自らに否定する詩を書く技巧に恵まれているとする。

12～14行→ソネット作者が彼らの主題そして彼ら自身を詩の中で永遠不滅化しようとする試みへの皮肉な評言。

ソネット 9 [P102]

12行→恋人の不在への言及。その旅立ちには真冬の厳寒と北の遠さに準えられる。

ソネット 9 [P103]

3行→この詩は著者の書く行為への自己言及を為し、それは今や他の者に引き継がなければならないとする。

14行→「貞節」は散文ロマンス『ユレイニア』で「淑徳」を表象するパンフィリアを表す。しかしながら、この最後の対句の意味は曖昧である。ソネット連環部におけるように、それが愛のキリスト教的精神的表現に向かっているのか、それとも自立と自我への執着の宣言と解釈出来るのか。後者だとすれば、愛と挫折の結合が永遠に続くことになり、男性詩人たちのソネット連作集の結末部分に描かれる自己快楽の放棄とは一線を画する。

《解 説》

著者について

メアリ・ロウス（1586/7-1651）は初期近代イングランド最初期の女性作家の一人であるのみならず、当時の最高に洗練された多芸多才な作家の一人と評価され、好意的な目で見れば、ベン・ジョンソン、ジョン・ダンそして伯父フィリップ・シドニーのような詩人たちに匹敵する作品を書いたとして注目に値する作家である。メアリ・ロウスの作品が過去四百年間に亘って無視され続けたという事実は、女性作家たちが女性というだけで、作品の文学的価値を全く考慮しないままに、等閑視され遺棄されて来たことの証拠である。事実、メアリ・ロウスは（ロバート・シドニー＝レスター伯の娘、ルネサンス詩人の華フィリップ・シドニーと文学サークルの花形メアリ・シドニー＝二代目ペンブルック伯夫人の姪、ウィリアム・ハーバート＝三代目ペンブルック伯の従妹として）シドニー一族の文学的絆を通して、貴重な文化的遺産の継承を主張出来たが、それと同時に、個人的文学的文脈で、女性のたしなみについての当時の規範から過激に逸脱したために、宮廷から追放され、ついには生涯を通じて薄明の憂き目を見ることになった。文学的観点からすれば、メアリ・ロウスはジェームズ朝宮廷における新進気鋭の革新的作家たちの一人である。女性が書いた最初のソネット連作集『パンフィリアからアムフィラントスへ』（以下『パンフィリア』と略記）、長大な散文ロマンス『モンゴメリ伯爵夫人のユレイニア』（以下『ユレイニア』と略記）、喜劇『愛神の勝利』など、各ジャンルの作品を残した。私生活では、世の非難にめげずに続いた従兄ハーバートとの不倫関係、それから生まれた二人の私生児の養育を通して、社会的因習に楯突くことを貫いた。恐らく、シドニー家の文学的遺産という伝統と女性作家としての新鮮で独自の洞察力とが複雑にないまぜになって、当時この上なく力強い詩を生み出すことになる豊かな個性と詩的言語の脈動とが、彼女の作品に付与されることになったのである。

メアリ・ロウスは、17世紀前半の最も重要な女性詩人として、ペトラルカの伝統を継承した恋愛詩集と散文ロマンスを書いたが、それらの文学史的事実とは別に、彼女の詩集の高い質と男性中心の文学的文化的社会というコンテクストにおいて自己表白を目指して悪戦苦闘する女性的感受性の提示に極めて興味深い点が見られる。当時は殆ど知られず、その後も大方無視されて来た彼女の著作物がほんの最近になって再発見され、幅広く議論され研究されるようになった所以である。

レディ・メアリ・ロウスは恐らく1587年10月18日に、ロバート・シドニー（後

のライル子爵及びレスター伯爵)とバーバラ(旧姓ガミッジ)の長姉として、呱呱の声を上げた。彼女の祖父、サー・ヘンリー・シドニーは、忠実なプロテスタントの行政官としてエリザベス女王に仕え、ウェールズやアイルランドの総督代理を勤めた。彼女の伯父、サー・フィリップ・シドニーについては多言を要すまい。伯母メアリは、ペンブルック伯令夫人として有名な文学的パトロンであり、自ら『聖歌』や他の著作の翻訳者で、シェイクスピアの最初の全集第一フォリオ版が献呈された三代目ペンブルック伯爵の実母であった。彼女の父は主として宮廷人として政府の役人として精力的に活躍する一方で、詩を書いた。彼女の母は文学を篤く庇護した。メアリ・ロウスが自ら出版に踏み切った作品『モントゴメリ伯令夫人のユレイニア』の題扉には、彼女の卓越した文化的家系的系譜が華々しく掲げられている。「正しく高貴なレスター伯爵ロバートの息女にして、永久に著名な誉れ高い騎士、フィリップ・シドニー卿と、先頃逝去されたこの上なく卓越したペンブルック伯令夫人メアリの姪」であると。僅かにオランダ戦線を歴戦中の父の許を訪れたり、ペンブルック伯爵のロンドン屋敷に家族で滞在したりするほかは、子供時代の殆どを生まれ育ったペンズハースト邸で過ごしたメアリが、(後にジョンソンが述べた言葉を借用すれば)「嫉妬深い夫」サー・ロバート・ロウスと「不釣り合いな結婚」をしたのは、1604年9月27日のことであった。夫はメアリの10歳年上、裕福な地主の長男で、(ジョンソン作「ロバート・ロウス卿に寄せて」で歌われているように)国王ジェームズ一世に絶好の狩猟場を提供する所領地を相続した。

結婚期間中、メアリは多くの時間をロンドンのペンブルック屋敷や宮廷で過ごし、宮廷では王妃アン御付きの女官の一人になったが、夫ロバートは華やかな宮廷生活よりは田舎滞在と狩猟を好んだという。メアリはジョンソン作の宮廷仮面劇二本に出演している。一本は、1605年(シェイクスピアの『オセロ』が宮廷で上演された直後)の『黒の仮面劇』で、「黒人の娘」役として「顔を黒く塗って」出演した。もう一本は、三年後の『美の仮面劇』である。シドニー家やペンブルック家に絶えず出入りしていたジョンソンとメアリとは、かなり親しい関係にあったようで、ジョンソンは1610年の劇作『錬金術師』をメアリ・ロウスに献じ、メアリやメアリの詩作について御世辞の歌を作っている。夫との間に初めて生まれた子供はジェームズ、1614年のこと。しかし、その僅か一月後、夫が亡くなり、メアリに残されたのは、年1,200ポンドの寡婦金、生後ひと月の幼児、そして23,000ポンドの借財であった。彼女は自分でその事態に対処しようとしたが、息子が1616年6月に亡くなり、その所領地は夫の弟の手に渡り、彼女の元にあるのは、積もる借金の山ばかり。メアリは1624年までに借金の半分を返済したと主張したが、一生涯経済的困難から解放されることはな

かった。

寡婦生活の初めの頃は、経済的困窮ばかりに拘わっていたのではない。恐らく夫が亡くなる前に始まったと覚しい従兄ウィリアム（1580-1630）との不倫は、夫の没後ではあるが、二人の私生児ウィリアムとキャサリンを産み落とすまでに発展した。ウィリアムは彼女より少し前に結婚し、精力的宮廷人として宮廷馬上槍試合や政治問題に積極的にかかわり、宮廷夫人たちの寵児であり、ジョンソンのパトロンでかつまた自らいっばしの詩人を気取った若い伯爵であった。二人の不倫関係がどれだけ続いたのかは、不明である。

二人の関係は言わば公然の秘密で、シドニー、ペンブルック両家で明白に認められていたようだ。そのような不義密通は稀ではなく、あからさまにではないにしても、ジェームズ一世時代の宮廷ではしばしば寛恕された。それにしても、メアリ・ロウスが宮廷内で不興を蒙ったのは、この事が原因なのか、あるいは1621年に『ユレイニア』を出版したことが原因なのか。『ユレイニア』は彼女の友人で、ペンブルック伯の義妹、モントゴメリ伯令夫人スーザンに献呈されたが、メアリ・ロウスに出版の意図があったのかどうか定かではない（たとえ出版しても金など入って来なかったであろう）。題扉は華麗だが、献辞の詩も序文めいた言葉もないのは、常ならぬことである。バックingham公爵へ宛てた彼女の釈明では、彼女の書き物は「端からわたくしの意志に反して売られました。わたくしにはそれらを出版する意図など全くありませんでした」。尤も、メアリ・ロウスは実は既にバックingham公に一部進呈してはいたが。

メアリ・ロウスは因習的に女性に期待されていることを、非宗教的な著作を物することで、またそれを出版することで、裏切ってしまった。さらに悪いことには、『ユレイニア』には宮廷で実際にあった出来事や実在の人物を明らかに元にして書かれた挿話や登場人物を含んでいた。その事が猛烈なスキャンダルを引き起こし、メアリ・ロウスはその著作物を回収することを余儀なくされ、次第に宮廷からの退去へと追い込まれることになった。その後、メアリ・ロウスの名は大方の記録から消えてしまうが、恐らく、自らの楽しみのために著作活動は続けたらしく、それが『ユレイニア』第二部や牧歌劇『愛神の勝利』に結実した。亡くなったのは、1653年の事と思われる。

これら人生の断片的記録から浮かび上がるメアリ・ロウス像は、自らに与えられた人生を力強く生き抜いた一人の確固たる女性のそれである。幼年時代を閑静なペンズハースト邸と父の赴任地であった風雲逆巻くオランダの両方で過ごし、シドニー家の遺産伝統へのしたたかな矜持を骨の髄まで注ぎ込まれたメアリ・ロウスは、詩人として文芸の庇護者として尽くすことで代々の伝統を支えようとした。それらの大志を果たすために、様々な苦難に直面することにな

り、失意の結婚は多大な借財とそれを返済するための生涯に及ぶ苦闘の結果となるが、彼女は自らの決断力を信頼していた。彼女の自立心が窺われるのは、従兄ハーバートとの堂々たる不倫と、私生児を産むことによって従来の慣習を侮る勇気である。たとえアン王妃の宮廷での恵まれた境遇を失うことになろうと、彼女は自らの散文ロマンスの持つ風刺的洞察力を武器にして宮廷に潜む墮落腐敗と偽善とを暴露した。家父長制に守られた男性優位社会で、このように自由奔放に生きた女性がかつていたことに思いを致しつつ、彼女の作品を読むことは、一興であろう。

### 作品について

『パンフィリアからアムフィラントスへ』は全部で103篇のソネットとソングから成る連作集で、散文ロマンス『ユレイニア』の一部として1621年に出版された。各詩は早くも1613年には草稿の形で回覧されていたらしいが、そのロマンス作品と併合する形で出版するに際して、配列・編集し直されたであろう。詩集はパンフィリアから恋人のアムフィラントスに宛てて作られたことになっており、当の二人は『ユレイニア』の登場人物であるからだ。ロマンスの付録的作品として、この詩集は慎ましい存在ではあるが、虚構の登場人物であると同時に、実在のメアリ・ロウスとウィリアム・ハーバートを表象する二人の恋人たちの進行中の恋愛の言説を生々しく形成している。テキストの自伝的要素については、ジョゼフィーヌ・ロバーツがメアリ・ロウスの生涯を虱潰しに調査した結果、いち早く確定されたが、この詩集を解釈するに当たって、それは重要な一面を提供している。例えば、パンフィリア／メアリ・ロウスに代表される貞節の主題は、アムフィラントス／ハーバートに代表される男の恋人の気まぐれな不実と対照される[この対照についての優れた分析がバイリン(1981)に見られる]。

しかしながら、作品における私的要素は直接的な恋愛関係の反映の域を出て、シドニー的詩の伝統を書き直す所まで行き着く。フィリップ・シドニー作『アストロフィルとステラ』、ロバート・シドニーの新プラトン主義、メアリ・シドニーのカルヴァン主義の影響は明らかに存在し、『パンフィリア』は剽窃作品と決めつける批評家がいるほどだが、『メアリ・ロウス詩集』の先達の編著者ロバーツは、シドニー一族の作品の多くの対応関係を突き止め、また1613年にソネット連作集を書こうという試みはやや旧弊を免れなかったが、メアリ・ロウスは劇的、ダンの言語を駆使し、恋する男／恋を拒絶する女というソネットの伝統的様式を逆転させたという貴重な事実を指摘した(1983)。同様にウォラー

(1986) は、メアリ・ロウスが男性ソネット作者の描く家父長制的世界に果敢に異議を申し立て、エリザベス朝期の「くすんだ」詩からジェームズ朝期の機知に富む形而上詩への転換を促したと力説する。ソネット連作集における性差逆転というメアリ・ロウスの革新的方式をこのように評価する批評家は後を絶たないが、ミラー(1990)、ルワルスキー(1993)、ウォラー(1993)の著作はとりわけ重要である。最近とみに明らかになった事は、ペトラルカからシドニーを經由してダンに至るまでの男性詩人の父権主義的言説を作り直すことにメアリ・ロウスが非常に巧みであり、かつまた各々の詩作品において、性差に基づく男女間の役割と期待を逆転し、近代初期イングランドにおける恋愛の解釈に根本的に新しい女性中心の考え方を持ち込んでいることである。

ソネットの形式については、伯父フィリップや父ロバートと同じく、メアリ・ロウスは八行連句と六行連句に分かれて脚韻を踏むイタリア式のソネット構造を基本にし、一番普通の形は、abbaabba/ccdeed と ababbaba/cdcdee であり、次に abbaabba/cddcee、ababbaba/ccdeed、abbaabba/cdcdee が続く。『ユレイニア』に含まれるソネットを併せると、全部で28種類の様々に異なるソネット形式が操られ、中には、脚韻が一つのみのソネットさえある。フィリップに倣って技法的実験を大胆に試みたメアリ・ロウスは、14篇のソネット連環[P77-P90]を編み出した。それは各詩の最後の行が次の詩の第一行として繰り返され、最後のソネットの最後の行が一番最初の行を繰り返し、こうして円環(メアリ・ロウスの詩の場合は、迷宮)が閉じられるという形式である。この形式を初めて英語で書いたのはフィリップであり(『オールド・アーケイディア』72番)、伯父の伝統がここでも活かされている。

ジョンソン詩の流れを汲むとされる平明優雅な文体、比較的直截な奇想または比喩表現、口語的語り口、効率的率直な言い回し、これらメアリ・ロウス詩の特徴は、力強い感動的效果を生み出す。その一方で、太陽と火(炎)、夜と暗闇、雲、星、眼、心臓の支配的イメージは、ヴィナスとキューピッドとしての愛の擬人化、悲嘆、嫉妬、希望、恐れなどの感情の擬人化、そして貞節、不在、沈黙などの精神的物理的状況の描写と相俟って、確かにペトラルカの伝統を踏まえて書かれている。この伝統の下で作られた詩では、恋する男が一方で精神を啓発してくれる理想的愛を夢見るが、他方でその挫折の憂き目を見る。恋する男は、愛する女性がかき立てる欲望に燃え立ちながら、彼女の冷酷無情な近寄り難さゆえに絶望に凍りつくという、二律背反的内的葛藤に捉えられる。恋する男が絶えず追いかけしかし自らを否定し、従おうとしながらしかし操ろうとするとき、逆説が支配的な修辞的技法となり、痛々しい自己矛盾が詩を支配するようになる。恋する男は、まるで呪物崇拜的に、愛する女性の美の品々(つ

まり、体の各部分) やその他の資質を詳述称揚するが、彼の主たる関心は自分本人にあり、自らの恋の苦悶を縷々描き出す。要するに、彼と彼の詩が女性の否認と不在を必要とするのは、自らの自己探求と自己創造を目的としてのことなのである。現に、彼の詩においては、愛する女性からの受け答えは殆ど聞かれず、社会的文学的慣習によって、女性は抑圧され黙らされている。ペトラルカ的詩の特徴は、求愛する男の詩人の側の殆ど病的な内省、妄念、強迫観念、自己意識、精神的不安定感が執拗に描出されていることだと言って過言でない。

しかし、メアリ・ロウスは女性詩人として必然的に、長く西欧詩歌を支配した圧倒的な文学的文化的男性的権威と抗い、これを克服しなければならない。その最大の手段は、詩における男女の役割の逆転である。『パンフィリア』では、求愛の語り手は女性であり、愛人の男性はものを言う事なく、彼の美の数々を誉め称える詳述はなく、彼の眼に言及する幾つかのソネットを除けば、直接に語りかけられることさえない。ただ、“will”という言葉に、“William Herbert”の残影が懸詞として僅かに見られるけれど。作品の叙述の焦点は、孤独で孤立した内気な女性の語り手と彼女の妄執、不安、苦悶に合わされ、彼女の心的状況が歌われることになる。

『パンフィリア』の詩的評価についてはある程度意見の一致を見たとしても、その構造と繋がり方についてはかなりの不一致が見られる。全体を2部に分割する者(マクラレン)、4部に分割する者(ポリッセン、ロバーツ、ルワルスキー)、5部に分割する者(マーティン)、果ては明確な配列順序が存在しないとする者(マステン)がいるが、この翻訳では次の7部に分けることにした。①P 1－P 55 ②P 56－P 62 ③P 63－P 72 ④P 73－P 76 ⑤P 77－P 90 ⑥P 91－P 94 ⑦P 95－P 103

①は恋愛の始まりとそれが惹起する当惑の感情を6ソネットに1ソングが8回繰り返して続くという形式で描いている。②では「喪失」の最初のほのめかしが、初めの連作箇所を逆転して6ソングに1ソネットが続く形で綴られている。③は連作全体の中心部分に置かれた10篇のソネットで作者の嫉妬心を探求する。④は③と容易に結び付くが、個人的反感から愛の哲学的観相へと橋渡しをする箇所として機能する。⑤は連作全体の鍵となる中心箇所、《ソネットの連環 (crown)》を形成し、作者の愛を新プラトン主義的精神的レベルまで高める内容である。⑥では4ソングを並べて連作は暗い皮肉な視点へ戻る。⑦は自然の形象を喚起して全体的に憂鬱な閉塞感を醸し出し、最後のソネットは詩的自我の放棄と共にテキストと恋愛の幕を閉じる。

このように連作集全体はロマンスの語りの図式を記し、近代初期イングランドにおける恋愛の言説の鍵となる主題を探求し、肉体的愛から精神的愛への飛

翔という新プラトン主義の提唱を跡付ける。この全体的変容と再生の過程はテクストに塗り込まれた性差逆転の構図と推移する情緒の利用、くすんだ言語から形而上的言語へ、宮廷のみやびから私的直接性への移行によって裏打ちされている。それゆえ、長い間無視され続けては来たが、性差意識の覚醒、作り直しと多元的言説のポスト・モダンの受容を備えたメアリ・ロウスの詩が、現代の我々に力強く訴えるのはさほど奇妙なことではないのである。

## テキストと参考文献について

### ① テキスト

- Martin, Randall ed. *Women Writers in Renaissance England*. "Longman Annotated Texts". Longman, 1997.
- Prichard, R. E. ed. *Lady Mary Wroth: Poems*. Keele Univ. Press, 1996.
- Roberts, J. A. ed. *The Poems of Lady Mary Wroth*. Louisiana State Univ. Press, 1983.
- \_\_\_\_\_.ed. *The First Part of The Countesse of Montgomeries Urania*. Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1995.
- \_\_\_\_\_.ed. [Completed by Suzanne Gossett & Janel Mueller]. *The Second Part of The Countesse of Montgomeries Urania*. Renaissance English Text Society, 1999.
- Waller, Gary ed. *Pamphilia to Amphilanthus*. Salzburg: Institut für Anglistik und Amerikanistik, Universität Salzburg, 1977.
- Wynne-Davies, Marion ed. *Women Poets of the Renaissance*. London: J. M. Dent, 1998.

### ② 参考文献

- Beilin, Elaine V. "'The onely perfect vertue': constancy in Mary Wroth's *Pamphilia to Amphilanthus*", *Spenser Studies*, 2 (1981), 229-45.
- \_\_\_\_\_. *Redeeming Eve: Women Writers of the English Renaissance*. Princeton Univ. Press, 1987.
- Brennan, Michael. *Literary Patronage in the English Renaissance: The Pembroke Family*. London: Routledge, 1988.
- Cavanagh, Sheila T. *Cherished Torment: The Emotional Geography of Lady Mary Wroth's "Urania"*. Duquesne Univ. Press, 2001.
- Harvey, Elizabeth & Katherine Eisaman Maus eds. *Soliciting Interpretation: Literary Theory and Seventeenth-Century English Poetry*. Univ. of Chicago Press, 1990.
- Haselkorn, Anne M. and Betty S. Travitsky eds. *The Renaissance Englishwoman in Print: Counterbalancing the Canon*. Univ. of Massachusetts Press, 1990.



- Jones, Ann Rosalind. *The Currency of Eros: Women's Love Lyric in Europe, 1540-1620*. Indiana Univ. Press, 1990.
- King, Sigrid. *Pilgrimage for Love: Essays in Early Modern Literature in Honor of Josephine A. Roberts*. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 1999.
- Krontiris, Tina. *Oppositional Voices: Women as Writers and Translators of Literature in the English Renaissance*. London: Routledge, 1992.
- Lamb, Mary Ellen. *Gender and Authorship in the Sidney Circle*. Univ. of Wisconsin Press, 1990.
- Lewalski, Barbara Kiefer. *Writing Women in Jacobean England*. Harvard Univ. Press, 1993.
- Miller, Naomi and Gary Waller eds. *Reading Mary Wroth: Representing Alternatives in Early Modern England*. Univ. of Tennessee Press, 1991.
- Moore, Mary B. *Desiring Voices: Women Sonneteers and Petrarchism*. Southern Illinois Univ. Press, 2000.
- Paulissen, May Nelson. *The Love Sonnets of Lady Mary Wroth*. Salzburg: Institut für Anglistik und Amerikanistik, Universität Salzburg, 1982.
- Roberts, Josephine A. "The biographical problem of *Pamphilia to Amphilanthus*". *Tulsa Studies in Women's Literature*, 1 (1982), 43-53.
- \_\_\_\_\_. "Lady Mary Wroth's sonnets: a labyrinth of the mind". *Journal of Women's Studies in Literature*, 1 (1979), 319-29.
- Wall, Wendy. *The Imprint of Gender: Authorship and Publication in the English Renaissance*. Cornell Univ. Press, 1993.
- Waller, Gary. *English Poetry of the Sixteenth Century*. London: Longman, 1986.
- \_\_\_\_\_. *The Sidney Family Romance: Mary Wroth, William Herbert and the Early Modern Construction of Gender*. Wayne State Univ. Press, 1993.

\*                      \*                      \*

杉本 美穂 (福岡大学非常勤講師)  
江藤 由紀 (中村学園大学非常勤講師)  
渡邊 晶子 (福岡女子大学大学院博士課程)  
福井由美子 (九州大学大学院修士課程)

[本稿は、平成14年度基盤研究(c)による研究報告の一部である。]